D.C r e m a t o r

しんかー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄ．Ｃｒｅｍａｔｏｒ

【Ｎコード】
Ｎ４７０１Ｍ

【作者名】
しんかー

【あらすじ】
転生者ロアルド・シュティールは、エクソシストとなって戦場を駆け巡る。
主人公の対アクマ武器の元ネタのＵＲＬは「第十一刻　六条火」の後書きに載せてあります。
主人公の容姿→ｈｔｔｐ：／／ａ．ｄｅｃｏ１．ｊｐ／１１７１７５／

第一刻　神の暇（前書き）

プロローグです。

第一刻　神の暇

道路に飛び出した子どもをかばって挽き肉になった俺を待ち受けていたのは、真っ白な空間。あらら、なんかヤベェなとか思ってたら声が聞こえたんだ。その声の言うには、君は死んだとか私は神だ云々かんぬんということらしいが、それはいい。問題は俺がこれからどうなるかだった。

「君はこれから別の世界で新しい生を授かる。今までより格段に命の危険は多いが、君の記憶を借りて一つ運命を設定しておいた。存分に使いなさい」

「は？言ってる意味が分かんないんですがっ！」

声だけの存在は意味深な言葉で答えると、別れを告げた。

「では、元気でな」

「ちょ、待っ……まふぅ」

謎の断末魔とともに俺の意識は遠のいていった。

†††

新しい生を授かるという言葉に若干の不安を抱いたのは十年前。

俺は見事に転生していた。西洋風の建物の建ちならぶ文明の穏やかな十九世紀の地中海、スペインだ。

当時を思い返してみれば、オムツやらなんやら恥ずかしい記憶ばかり残っている。まあ今では結構楽しくやってるんだけど。

「ロアルド、今日はお父さん帰ってくるわよ！」

「母さん、それ昨日も聞いた」

俺ことロアルド・シュティールは十才の子ども。精神年齢は三十路超えのもうすぐオッサンだ。前世で俺がかばった子も同じくらいだったと思う。実は母さんより生きた時間は長かったりする。正直複雑な気持ちだ。

相変わらずあの神が俺を転生させた理由は分からないが、俺は二回目のチャンスが与えられたことを感謝している。鉱山勤めの父と自宅で糸紡ぎの内職をする母、それと年の割に大人びた俺。優しい、理想の三人家族。前世ではなかった、本当の安らぎを得ていた。

……あの日までは。

「今、この町にいる外科医は出張でいません……残念ながら内科の私では応急措置ぐらいしか……申し訳ありません」

「そんな…そんなのって……神様ぁ……！」

母さんが父さんの横たわるベッドで泣きじゃくっている。それを

優しく慰める父さんの膝から下には、目も当てられないほどにズタズタになった二本の脚。火薬の爆発事故。他にも多くの犠牲者を出したらしいが、今の俺の耳には何も入ってこなかった。

「アル、アルゥ！どうして……！」

「キャリー……強く、生きて……。大、丈夫……少し早く逝くだけさ……」

どうして、こんなときに限っていないのだろう。どうして、神はこんな苦しみを俺に強いるのだろう。お前の言う“運命”とやらはこれか？俺はただ穏やかに暮らしていたかっただけなのに……。

お前の存在を知っているからこそ、俺はお前を信じられないよ。

†††

それからしばらくして、父の死の真相が明かされた。爆発で燃え上がる立坑内で、負傷者を逃がす途中に脚が瓦礫（がれき）の下敷きとなったらしい。その結果、役目を果たすことのできなくなった脚が壊死（えし）して循環系に支障をきたしたのだという。

出張でいなかった外科医の男が帰ってきたとき、俺は思いっきり八つ当りをした。それはもう子どものように、無茶苦茶な言いがかりとともに。

それからまたしばらくして、俺は外科医になることを決めた。前世の現代医療みたいにメスを使った手術なんかは無理だが、切除と縫合ならできる。そのために身体を鍛え、医学を学んだ。

†††

あの日以来、母さんはまるで人形のようになってしまった。俺が外科医を目指すと宣言したときはぎこちなく笑うだけだったし、こないだ俺が十三才の誕生日を迎えたときも片言でおめでとうと言うだけだった。

「いったいどうしちまったんだよ、母さん。最近全然食べないし、父さんのことは悲しかったけど二人で乗り越えていこうって約束したじゃんか」

「ゴメンネ、ロア……。今ハお腹いっぱイナの」

目も虚ろで言葉の端々に感じるはずの生気が微塵もない。魂が抜け落ちてしまったかのように思う。父さんが死ぬ前は無駄が付くほど元気だったのに……。

「いつまでも屋内で寝てたら不健康だぜ。たまには外に出よう」

気分でも悪いのかと思って、俺は母さんを外に連れ出すことにした。寝たきりで足腰が弱っている母さんをベッドから車椅子に乗せ替える。同年代と比べて背が高く毎日の筋トレで膂力(りょりょく)もある俺にと

って、母さん一人抱えるくらいわけない。あっさりと母さんを移し替えると、支度をして家を出た。

「母さん、久しぶりに外食にしよう。前に先生が連れていってくれた定食屋がスゲェ美味かったんだ。母さんもきっと気に入ると思うぜ」

相変わらず母さんは相づちを打つだけだったんだけど、とりあえず楽しんでくれてるみたいでよかった。ちなみに先生っていうのは俺のバイト先の外科医の先生。

定食屋に着くと、パエリアを二人前注文する。しかしなかなかスプーンを手に取らない母さんに、俺は食べるのを促すことにした。

「母さん、早くしないと覚めちまうよ。遠慮しなくていいから食べなよ」

「食べテ、イイの……？」

「もちろん、そのために注文したんだから」

「分カった……じゃア」

バリバリバリバリッ！

「へ……？」

料理の盛られた皿を見ていたら突然鳴った怪音に、俺は一瞬耳を疑った。そして母さんの方を見て目を疑った。身体は硬直した。

そこにいたのは母さんではなく、灰色のボールに複数の砲身らしき突起の生えた“何か”だった。

いや、“何か”じゃない。俺はこいつに見覚えがある。実際に見たことがあるわけじゃない、知っている。中心部に母さんの顔を称(たた)えたこいつは、間違いなく――

「――AKUMA(アクマ)……」

「その通りだ坊主ゥ！」

「ッ！」

背後から声がした。しかし振り向くことができない。目の前にいるこいつは、“アクマ”がなんでここにいる！？あれは空想上のものであって、フィクションの産物だ。現実にいるわけがない！なのになぜ……神の言っていた“異世界”ってこういうことだったのか！？いやそれよりなんで母さんの皮を被ってるんだよ、おかしいじゃないか！強く生きるって約束したのに、なんで……！？

「オイ坊主、いつまでもそこにいると危ねェぞ」

俺のすぐ隣に来て見下ろしてくる視線にようやく自らの視線を返すことができた。そこで俺の身体は再び硬直した。

そこにいたのは、恐ろしい仮面を付け巨大な双剣を携(たずさ)えた大男、三百六十度どこからみても間違いようがない、ウィンターズ・ソカロその人だった。

†††

高速回転する双剣がアクマを切り裂いていく。あちらこちらから新たな敵が湧いて出るも、炎を纏った刃が投擲（とうてき）され、ブーメランのように戻ってくると十体単位でいたアクマたちがみるみる数を減らしていった。

アクマ、ウィンターズ・ソカロ、イノセンス。間違いない、ここはD・Ｇｒａｙｌｍａｎの世界だ。こんな非常識な光景が、俺のいた世界で起こるはずがない。転生、そういうことだったのか……。なら、いろいろ覚悟しなければなるまい。母さんの、いや父さんのアクマもすでに壊されてしまった。安らかに逝けただろうか。

「クハハハハハハ！」

アクマを狩っていく男、ウィンターズ・ソカロ。殺戮を快楽とする享楽主義者。死刑囚として拘留されていたが、イノセンスの適合者であったことからエクソシストとなることを条件に釈放され、最終的に元帥にまで登り詰めた男。Ｄグレでもっとも性質（たち）の悪いキャラの一人。そんな男がなぜこのタイミングでここにいるのか、それは“神のみぞ知る”ことだろう。

スパイクの双剣、マドネスが回転を止めると、そこにはもうアクマは残っていなかった。

後ろ手にソカロが話しかけてくる。

「なぁ坊主、お前ェはどうしたい？」

両親をアクマにされて、身寄りを失って、自分の無力さを知った。今の俺には、この答えしか出しようもなかったのは言うまでもないだろう。

「俺は……戦いたい……！」

俺の返事にソカロは気分をよくしたみたいで、振り返り凶悪な笑みを向けると左の手のひらにあった光る物体を投げてよこした。

「なら、コイツはお前ェのもんだ」

双剣が肩当てへと変貌を遂げると、俺の手中のイノセンスが形を変え始めた。しかしそれは一定の形状を保つことなく、流動的かつ機械的に変形を続けていた。

「来い、坊主！俺はウィンターズ・ソカロ、黒の教団の元帥。お前ェは今からエクソシストだ！今俺がしたみたいにアクマどもをミンチにするのが仕事だ、いいな！」

「イエス、サー！」

俺たちは教団本部へと向かった。

第一刻　神の暇（後書き）

いろいろ頑張るのでよろしくお願いします。

第二刻　教団入り（前書き）

ＰＶ３８４、ユニーク１４３
ありがとうございます！

なんて可愛い数字……（＊、ω、）ポッ

第二刻　教団入り

ソカロ元帥とともに黒の教団本部へとおもむく間、俺のイノセンスが形状を安定させることはなかった。これにもあの神が何か細工しているのだろうか。ひとまずそれはいいとして、教団入りだ。まったく運命ってやつはいつだって突然あらわれて、好きなだけ引っ掻き回して去っていくな。少し前まで不幸がありながらも穏やかに暮らしていたのに、今じゃ聖戦の尖兵（せんぺい）だ。適合したはずのイノセンスも身体に入ってくる気配はない。でも念じれば激しく変形する。

父さんがアクマなっていたことも、この間にちゃんと受け入れられるようになった。もともとアクマのことは知っていたし、破壊されたのだから二人とも安らかに逝けたと信仰している。それに三年もの間レベル1でいれたのは、父さんの正義感がアクマの本能を押さえつけていたからだと思うから。最期に父親の尊敬できるところを見れてよかったとも思ってる。

何はともあれ、もう本部地下の地下水路だ。今がいつなのかは分からなくても、ソカロが元帥をしていることからせいぜい原作の数年前くらいだろう。

「着いたぞ坊主」

「ロアルドです」

「だが坊主は坊主だ」

「……」

水路入り口で見つけた団員の漕ぐ舟が岸に着くと、ソカロ元帥は俺を片手で持ち上げて上陸した。弾みで舟は大きく揺れ、御者は尻もちをつく。さすが二メートル超えのマッチョともなると重さも格別だ。百六十ある俺も軽々持ち上げるその腕力も凄まじいの一言。

「これからどうすんすか？」

「室長――司令官みたいなもんだが、そいつのとこに行ってお前を引き渡す。後は知らん」

「な……薄情な……」

やはりというか、この元死刑囚に責任感だとか人情だとかはないらしい。でもまあコムイさんならむしろこの人より信用あるか……。

俺たちはエレベーターに乗って、司令室へと上がっていった。

†††

率直に言おう……

「なんでだ！？」

「あぁ？どうした」

ソカロ元帥はノックもせずに司令室の扉を蹴り開けた。そしてそこにいたのは、眼鏡をかけた長身の青年ではなく――

――目付きの鋭いオッサンだった。

なんでだなんでだなんでだなんでだ！ソカロ元帥がベンチに腰掛けながら荒く報告を済ます間も、俺の中で疑問は巡り続けた。ソカロ元帥と話しているということはこのオッサンが室長なのだろう。ではコムイは？まさか、まだ入団してない？そんな、じゃあリナリーはまだ幼女ということか？俺もうとっくに少年なんだが……リナリールートは犯罪だな……。クソッ、そうこうしている内にヘブラスカの間へと行くことになった。

「君のイノセンスを調べにヘブラスカの間へ行く。付いて来たまえ、シュティール君」

「……分かった」

沈み込む気持ちを持ち前の精神力でなんとか支えながら、俺は逆ピラミッド型の中央エレベーターに乗った。

みるみる深く潜っていき、暗闇の中で五つの光条を見た。

『それは神のイノセンス、全知全能の力なり。また一つ、我らは神を手に入れた……』

ついに来たか、これからヘブラスカと面会だ。何げに原作キャラの二人目の出会いだな。

「黒の教団のトップ、大元帥の方々だ。君の価値をお見せしなさい」

嫌な言い方だ。まるで適合者であることだけが俺の価値みたく言う。原作でのコムイも同じようなことを言っていたが、あれは大元帥のための建前だったのかもな。

「イ…イノセンス……」

奥の方から青白く光を放つヘブラスカが見えた。生は迫力がすごい。周りから触手が現れて、俺の手の上のイノセンスを取り囲んだ。俺のイノセンスは俺以外が触ると高温を発することが分かっていたが、ヘブラスカには通用しないようで、顔を近付けてきたかと思うとローズクロスの浮かぶ額を俺の額に重ね合わせた。

「４％……１２％……２６％……３９……４６……５７……６９％！　どうやら君のイノセンスとのシンクロ率の最高値は…６９％のようだ……修行を怠るな……。あと…君のイノセンスは変わっているな……一つの形に押し込まれるのが嫌いらしい……。加工するなら…複雑な形状になるだろうな……」

ヘブラスカはそこまで言うと顔を引っ込め、続けて“預言”を贈ってくれた。

「君のイノセンスはその炎と刃をもて、未来を切り拓く明星（みょうじょう）となるだろう……手にした力で、皆を支えてくれ……」

“よそ者”の俺でも預言は授かるんだな、とか思いながら、俺はヘブラスカに別れを告げた。

†††

俺のイノセンスは装備型だった。寿命が縮まなくてよかったと思う反面、戦闘でのリスクが大きくなるのは少し不安だ。加えてどのような形になるのかまだ分からないし、身体は鍛えているものの立ち回りなんかはド素人だ。ソカロ元帥に聞いてみたら、

「ガキのお守りは御免だ」

ということで、しばらくは本部暮らしだ。対アクマ武器もなにやら俺のに限ってこずるようで、完成まで時間がかかるらしい。イノセンスの番人たるヘブラスカをして「変わっている」と言わしめるほどだから、そういうことなのだろう。

とにかく得物が完成するまではイノセンス関連の修行はお預けだ。鍛練場で武闘派の探索部隊（ファインダー）連中に教えを請うしかないだろう。

だが、それよりも気になるのはリナリーのことだ。コムイが来ていないということはルベリエが幼女リナリーに絶賛トラウマ植え付け中だということ。これは非常にまずい。なんとかして助けてやらねばならん。恋愛対象にはなりえないが――萌えの対象にはなる――放っておくわけにもいくまい。万一精神疾患なんてなったら目も当てられない。

というわけで、俺は今医務室に向かっている。記憶が確かならリナリーの最初の話し相手は婦長だったはずだから、たいていそこに

いるはずだ。それにリナリーの年齢が分かれば、今が原作開始何年前なのか正確につかめる。ソカロ元帥に聞くのはなんというか、怖いんだよな。我ながら小心者だ。さっきの鍛練のこと聞くのも内心ビクビクだったんだぜ？

目的の医務室に着いたところで、ドアをノックし入ってみた。

「ちーす、新人エクソシスト見習いのロアルドでーす」

とたんに室内の視線が患者看護師問わず俺に集中する。うを、痛いぞ。

「あなたが……」

「えっと、婦長さんですか？ロアルド・シュティールです。これからお世話になると思うんで、よろしく」

きつめだけど思いやりを含んだ目、やはりこの人が婦長か……。

当たり障りのない挨拶とともに握手を交わすと、婦長は口を開いた。

「あなたは何歳かしら？」

「十三ですが……どうかされたんですか？」

精神年齢は三十路超えてますが……。

そう答えると、婦長は少しだけ表情を緩めた。俺の年齢を聞いてくるってことは、やはりリナリー関係なのだろう。ここじゃなんだ

からと婦長は俺を奥の部屋へと通された。

「実は……」

俺は婦長さんからリナリーについていろいろ聞かされた。イノセンスの適合者だと判明してから教団に連れて行かれ、たった一人の肉親の兄（コムイ）と引き離されて軟禁状態にあること。来る日も来る日も“実験”と称してイノセンスと無理なシンクロを強要されていること。その実態は強烈な痛みを伴（ともな）う危険な行為で、ボロボロになって帰ってくることもあるという、幼い子どもの体験としてはあまりに壮絶なものだった。

「それで、俺に彼女の兄代わりになってほしいと……そういうことですね？」

「えぇ……まだ六歳のあの子には今の環境はあまりに過酷です……。だから、同じ適合者で歳もある程度近いあなたに、あの子を支える手助けをしてほしいのです……！」

今までずっとリナリーを見て悲しみに歪ませてきたのだろう目を俺に向けて、婦長は訴えた。

「分かりました、俺でできることなら何でもしましょう。これでもここに来る前は医者を目指してたんです、放っとけませんよ」

「あぁ……ありがとう……。これでリナリーも希望を持てるはずだわ。本当にありがとう……」

まだ救えると決まったわけでもないのに、婦長は泣きながら感謝してきた。思わず俺も目頭が少し熱くなった。

本当に優しい人なんだな……。

「あなたに感じた雰囲気はそれが元だったのね……。適合者でなければ、きっと素晴らしい医者になれたでしょう」

それから少し話して、俺はリナリーの軟禁されている部屋に通されることになった。

ちょっと不用意な感もあるが、俺がリナリーを助けてやれればそれで済む話だから。コムイが来るまでなんとか保たせるかな。

†††

「リナリー、今日は前に言ってた新人適合者の子が来てるわよ」

「婦長……さん？」

狭い室内、ベッドに横たわる少女、いや幼女がこっちを向いた。幼女リナリー可愛いなあとか思いながら、緩んだ頬を人のいい笑みで誤魔化してベッドの縁にしゃがむ。

「ロアルド・シュティールっていうんだ。ロアって呼んでくれ、リナリー」

「……ロア？」

「なんだい？リナリー」

仲良くなる秘訣はとにかく相手の名前を呼ぶこと！　自分の名前を呼んでもらうこと！　胸の中で復唱しながら、俺はリナリーにできるだけ優しい声色で聞き返した。

小さな唇から悲痛の声が響いた。

「兄さんは……コムイ兄さんはどこ……？」

はっとした。ただ肉親を求める姿に再び目頭が熱くなった。

あぁ、結局三十をとうに超えた俺の精神が感じる悲しみなんて、この幼い女の子が感じる生き別れの寂しさの足元にも及ばないだろう。

このときすでに、俺はリナリーに大分入れ込んでしまっていたのかもしれない。

「リナリーの兄さんは、今きっとリナリーに会うために頑張っているはずだ。安心しな、必ずリナリーに会いに来るさ」

「ホント……？ホントに兄さんは会いに来るの？」

「当たり前だろ？リナリーの兄さんなんだから。来るに決まってる。それに、リナリーの兄さんが来るまで、俺がリナリーの兄さんの代わりになってやるから、大丈夫だよ」

未来を知っている俺だからこそ言えること。何を知ったふうなと

思われるかもしれないが、知っているのだから仕方ない。俺は俺のできることをするだけだ。

俺と話していくらか希望を持つことができたのか、少しだけリナリーの顔色はよくなった。

「じゃあ……ロア兄さんだね」

うを、“ロア兄さん”だとっ！？　おいしい、おいしすぎるぞリナリー！　あぁ、これで俺はエクソシストとして戦えるっ。

「ねぇ、一つお願いがあるの……」

「言ってみな？」

「エクソシストって世界中を回るんでしょ……？　だったらもしコムイ兄さんを見つけたら、待ってるって…伝えて！　お願いっ！」

「あぁ、分かった……約束する」

コムイならきっとアジア支部にいるはずだ。一人前なったら、真っ先に向かってリナリーのことを知らせよう。コムイの奴泣いて喜ぶな。

「ありがとう」

それからしばらくリナリーと話して過ごした。話し相手が少なかったろうリナリーの話に、俺は聞き役に徹し、俺が部屋を出るころには少しだけ生気が増しているように見えた。

俺はリナリーの頭を撫で、また来ると言ってその場を去った。

それが誤りであることも知らずに……。

第三刻　決意（前書き）

ＰＶ１３５０、ユニーク３５６、お気に入り６。
ありがとうございます！

今回は短めです。

第三刻　決意

俺は重大な過ちを犯した。

鍛練場で体操技術の手解きを受けていたときのことだ。突然婦長が血相を変えてやってきた。しきりにシュティール君と叫びながら。

「どうされたんですか？」

「リナリーがっ……！」

その一節だけで俺には十分だった。俺はすぐに鍛練場を飛び出し、中央エレベーターの通る立坑（りっこう）に身を投げた。

何を浮かれていたのだろう……。

リナリーを一人にしていいはずがないのに……。

「リナリーッ！」

適合者として強化されているであろう身体が、着地の衝撃で軋んだ。体勢が崩れ床に盛大に頭を打ち付けると、どくどくと熱い痛みとともに血が吹き出した。

すでに満身創痍だった肢体に鞭打ち、立ち上がって目を見開く。

数人のローブと目付きの鋭い中年の男。彼らに囲まれて倒れているのは件（くだん）の少女。血を吐き、打ちのめされたような瞳を向けてくる。

俺の、せいだ……。

「何、やってんだ……」

俺が、リナリーの側を離れたから……。

「リナリーに何やってんだよ……！」

兄代わりが聞いて呆れる。言った側からリナリーを傷つけて……。

「何とは、何かね？」

「俺の妹分に血ィ吐かせて、何やってんだって聞いてんだよ！」

気情だ。兄貴分なんて言えた筋（すじ）でもないのに……。一人よがりな、所詮兄代わりと言い訳して家族を失った寂しさを埋め合わせたいだけの自己欺瞞（じこぎまん）でしかないのに……。

それでも、叫ばずにはいられなかった。

「リナリーは、俺の妹分だっ！　傷つけるってんなら容赦しねぇぞ！」

†††

「ロア兄さん……？」

隣のベッドで眠っているわたしの新しい兄さんを見る。

どうしてあのとき助けにきてくれたんだろう。

会ってまだ一日もたってないのに、なんでそこまでしてわたしに構うのだろう。

なんで怖いおじさんたちに大声で話しかけれるのだろう。

高いところから飛び降りて、とても痛そうだった。頭から血を流してふらふらしてて、それでも力いっぱい声を出してわたしを守ろうとしてくれた。

コムイ兄さんと同じだ。コムイ兄さんもぶたれても立ち上がって、わたしを連れ戻そうとしてくれた。ボロボロになりながら、わたしを守ろうとしてくれた。

「兄さん……」

どっちの兄さんを呼んだのかは、自分でも分からなかった。

でも、少しだけ心が軽くなったみたいに感じた。

「わたしよりも大ケガだよ」

兄さんは、なんでそうなんだろう。

起きたら聞いてみよう。

「ありがとう、ロア兄さん……」

†††

起きたら隣のベッドに小さなリナリーがいて、自分のいるのがリナリーの軟禁部屋だと気付いて、リナリーに質問責めにあって、自分の不甲斐なさに泣いて、なぜかリナリーに慰められて……。

それから婦長の制止を振り切って司令室に殴り込んで、脚の怪我を悪化させて悶え苦しんで、軟禁部屋に引きずり戻されて、鎖で巻かれたのをリナリーに笑われて、連られて俺も笑って……。

今はリナリーは眠っている。

俺は守らなきゃならない。このか弱い幼…少女を。“コムイはきっと会いに来る”だなんて、一見何の根拠もない俺の言葉を希望にしてくれた、健気な少女を。

「リナリー……」

点滴の針が痛々しい左腕を晒しながら、安らかな寝顔を見せる少

女。今“この世界”でもっとも大切な存在。

「俺が守るよ……」

決意とともに、俺は眠りについた。

第四刻　焔葬ノ刃（クレメイター）（前書き）

ＰＶ２４１０、ユニーク５９３、お気に入り１１。
ありがとうございます！

感想欲しい……

第四刻　焔葬ノ刄（クレメイター）

俺が入団してから二ヶ月、ようやく手足のケガが治った。リナリーの軟禁を緩めたり、何だかんだでルベリエの“お菓子の”ファンになったり、ヘブラスカと仲良くなったりしていた中（もちろんリナリーとは毎日顔を合わせた）、俺にとって新たなビッグイベントがあった。

難航していた俺の対アクマ武器製造が収束を見たのだ。

俺以外の接触をとことん拒むそれを、ヘブラスカの体内から少しずつ少しずつ整形し、科学班の英知を決して、組み立ててはヘブラスカの体内に戻すという繰り返しの末に、対アクマ武器は完成した。

その形状、性能を目の当たりにした科学班の連中の手で、保留となっていた俺の師匠は決定した。

満場一致でウィンターズ・ソカロ元帥。　自分でもだろうなと思った。手の内にある対アクマ武器を見やる。

基部からは無骨な二つのグリップが生えている。一つは縦向きでもう一つは横向き。構えるとちょうど正面に向かって一・三メートルはあろうかという十字を刻まれた板状のレールがあって、そのレールの上を走るのは鎖のように連なった肉厚の刃。漆黒のボディにその刃だけが、炎を纏い赤熱していた。それはさながら蛍光灯のようで……。

俺の対アクマ武器は、赤熱チェーンソーだった。名を“焔葬ノ刄（クレメイター）

”という。なるほどソカロ元帥でなければ、コイツの扱い方を説くことはできまい。

赤炎を纏うその影にどこか懐かしさを感じるが、それがなぜかは分からない。神はあのとき何と言って俺を送り出したのだったか。ただ――

――“全てを焼き尽くす圧倒的な暴力”

その言葉が頭から離れなかった。

さて、ソカロ元帥に師事することは本人も了承済みなのだが、基本から手取り足取り教えてくれるほど甘い人物でもないため、レベル１一体を瞬殺できるくらいの実力になるまでは本部にお預けだ。というのも、俺の対アクマ武器、光るしうるさいしと、とにかく目立つ。部隊に俺一人いるだけで、敵陣のど真ん中に突っ込んだことになるのだ。そういうわけで、まだ未熟な段階で実戦には出せないという結論に達した。俺としてはリナリーといる時間が増えるから嬉しいのだが、やはり戦いたいという欲求はある。

実戦に出れないとなると、ヘブラスカ監修の下鍛練場にてイノセンスとのシンクロ率をあげる訓練をすることになるのだが、これもまた最初からハードで、長時間発動状態をキープしたり火力の調節や刃部分の変形なんかを同時に行わなくてはならない。焔葬ノ刄の非発動状態ではノコギリの部分が存在せず、発動するとある程度形状を変化させることができる。

そこでその特性を生かした修行というのがこれだ。

「チェーンソーアート」

「なぁにそれ？」

「危ないからあんまり近付くんじゃないぞ」

「はーい」

うぅ、リナリー可愛いすぎる……！いっそのこと男としてアプローチしてみるか……いやっ！それは兄と慕ってくれているリナリーに対してあまりに不誠実だ！ロリナリー誘拐……ダメ、絶対！

チェーンソーアートとは読んで字のごとし、チェーンソーで木彫りの彫刻をすることを言う。用途に応じて形状の異なる刃を使い分け、作品をつくる。集中力の求められる繊細な作業のため戦闘には関係ないが、シンクロ率をあげるためにはとてもよい方法だと思う。それに火加減の練習にもなる。極限まで火力を落とさないと、すぐに火が燃え移ってしまうからだ。

お題はリナリーが考えてくれる。ちなみにリナリーに俺の修行風景を見せることで、イノセンスへの興味を促す狙いもあったりする。この辺は建前だが、リナリーを連れ出す正当な理由として必要だったのだ。

「リナリー、何を彫ってほしい？」

「えーと、じゃあ鳥さん！」

鳥さん……とりさん……トリサン……。可愛い……！

ダメだダメだっ、これはあくまで修行なのだから。

「分かった、じゃあカラスでも彫るか」

発動したままアイドリングしてあった“焔葬ノ刃”を始動させる。刃は大きく、回転数を上げ、炎はゼロに。リナリーが小さな両手で耳をふさぐ。

俺は手中で金切り声を上げるチェーンソーを振りかぶった。

†††

どうしてこうなった……！

「兄さん……」

目の前には抑えきれなかった熱で炭化し、所々火のくすぶる歪（いびつ）な物体、もはや黒い以外にカラスとの共通点など微塵も残っていない植物繊維の塊があった。

「ロア兄さん、初めてだし仕方ないよ」

俺の団服の裾を掴んで言うリナリー。幼女に慰められる俺……。鍛練場の隅っこにいながら周りから向けられる視線が痛い。うるさすぎるだの、そのわりにクオリティが低いだの陰口はばっちり聞こえている。なんで屋内でやるのかって？リナリーの行動範囲が制限されてるからだよ！文句あるなら長官に言え！

しかし自分たちを中心に広がるおがくず絨毯は誰のせいでもないので、後始末はつけねばならない。

「……えっと、掃除しよっか」

「うん」

俺は箒（ほうき）、リナリーはちり取りを持ち、大きな破片（“作品”を含む）は台車に載せて、残骸を撤去していったのだった。

†††

ロア兄さんがわたしの兄さんになってから一年がたった。兄さんの誕生日に婦長さんに頼んでおいた十字架のネックレスをプレゼントしたらとても喜んでくれて、抱きしめてくれた。

“ちぇーんそーあーと”も続けてて、最初こそひどい出来だったけど、今ではかなり上手になっている。

そんないつも一緒にいる兄さんだったけど、兄さんをここに連れてきた“げんすい”っていう人が帰ってきて、兄さんはその人としばらく旅にでるらしい。

もちろんわたしは反対した。せっかく一人じゃなくなったのに、また家族と離ればなれになるなんて絶対イヤだ。

「ロア兄さんっ！行かないで！」

「リナリー、別に今生の別れじゃないんだから……。半年に一回は帰ってくる。それに室長や長官にも言っておいたから、もう“あんなこと”はされないはずだ。俺も頑張るから、できるだけ早く帰ってくるよ」

「ホント……？」

「あぁ、ホントだ。俺が今までリナリーに嘘ついたことあったか？」

「ううん、ないよ」

「だろう？　リナリーはいい子だから、お留守番できるな？」

「……うん」

そう答えると、ロア兄さんは頭を撫でてくれて、それからわたしを抱きしめると額にキスをした。

「愛してるよ、リナリー。お土産買ってくるから……行ってきます」

「行ってらっしゃい……」

兄さんはわたしを離すと、微笑んで舟に乗り込んだ。

†††

「砂糖を吐きそうな馴れ合いしやがって」

ソカロ元帥が悪態をつく。

「甘いのは嫌いですか？師匠」

「大っ嫌いだ」

向かい合って座るソカロ元帥の目は、三十センチ近く高い標高にあった。俺もこの一年で結構伸びたんだが、まだまだ及ばないらしい。いや、及びたくはないけどさ。しかし十四歳で百七十超えってのも珍しい。いったいどこまで伸びるのか、ちょっと不安だ。

「最初の目的地は？　願わくばアジアに行ってみたいんですが」

「あ？　じゃあ北アメリカで決まりだな」

「なっ！？」

「シュティールぅ、お前ェ何様のつもりだ？腰巾着が意見してんじゃねぇよ」

「……はい」

相変わらずの傍若無人ぶりですね！殺人鬼がっ！

「いや……気が変わった」

「えっ、じゃあ……！」

「南アメリカだ」

「はぁ？ふざけんなこのキチ――ゴボゴボゴボゴボ……！」

「何様のつもりだって聞いてんだ、あぁ！？」

沈められました……。

第四刻　焔葬ノ刃（クレメイター）（後書き）

主人公の姓のシュティールは、チェーンソーで特許を取り会社を設立したシュティールさんからとっています。

第五刻　鉄の味（前書き）

ＰＶ４５８１、ユニーク９４２、お気に入り１８。
ありがとうございます！

ゆっくりでも順調に伸びてきて嬉しいです。ギブミー感想……。

第五刻　鉄の味

ヒュイィィィィィィィ！

赤炎を纏う“焔葬の刃（クレメイター）”が、悲鳴とともに灰色の装甲を掻き切っていく。断面を紅く染めながら、続けざまにやって来る三センチほどの鉤爪のような刃に切り裂かれるアクマを見、ぬるりとした感触が脳に刻み付けられる。

止めどなく溢れ全身を満たすアドレナリンが視覚する世界をスローモーションに圧縮し、初めての“破壊”の快感が根を張るまでの時間を稼いだ。

「タノシイ……！」

凶音と緊張感にバトルトリップへと叩き落とされた神経回路は、俺の意識を獣のそれへと変貌させる。昇華と言ってもいい。俺の気分はかつてないほどに高揚していた。

解体され爆炎を吹き出しながら地に落ちるレベル1アクマを視界から除去し、次の獲物を探す。

9時方向、こっちを狙う砲身を確認して全力疾走。アクマを中心に迂回（うかい）する。俺の足跡をなぞって血の弾丸が弾痕を残すのに、映画の主人公気分になってさらにテンションが上がる。長い手足から繰り出されるスプリントにアクマは着いてこれないのか、その巨体をゆっくり旋回させた。

今だ……！

殺(ヤ)り時を見切った俺は走り高跳びの要領でジャンプする。打ち上げられた身体は仰向けになり、“焔葬の刃”をスタビライザーにして空中で一回転。見事にボール野郎の上部を抉(えぐ)り取ることに成功した。

ゴッドイーターのオープニングで下乳アリサのやってたアクロバットだったが、案外やればできるもんだ。まあ日々の練習の成果なんだが。触れたものは何でも切り刻んで焼き尽くす“焔葬の刃”だからこそ可能な技でもある。

「次ッ！」

一時方向、レベル1。もう一つ試したい技があった。先の二体は直接的な斬撃――と言うにはいささか過激だが――によって破壊したが、炎だけではどうか。その威力が知りたい。やはり遠距離攻撃手段があるのとないのとでは違う。イノセンスの炎という流動性のある存在は、火力次第では盾にもなるのだ。その制圧力は、火炎放射器を見れば分かるだろう。

まあ技というほどのものでもあるまい。俺の対アクマ武器には特に特殊能力とかはないのだ。ただの炎を纏った鎖鋸(くさりのこぎり)でしかない。威力は随一だが……こうして見るとなんてロマンなんだ……まさに漢(おとこ)の武器だな。

と、まあ御託はいい。今はアクマだ。楽しくて仕方ない。俺は“焔葬の刃”の回転数を上げ、炎の出力を全開にした。さらに高く心地よい悲鳴を響かせる“焔葬の刃”。耳が潰れそうだ、慣れたが。

そして俺は燃えるチェーンソーを大きく振りかぶり、一閃。

「だっしゃぁぁぁあっ！」

わきまえない解体屋気合いの雄叫びとともに炎の剣気を放った。

ギャァァァァァァァ！

ボール型のアクマは断末魔の叫びを上げながら火葬された。申し分ない威力、しかしレベル2に当たるかは疑問だな。六幻の界蟲といい勝負といったところか……打ち合ったら六幻は粉々だろうが。

何はともあれ殲滅完了。ミッションコンプリートだ。俺の初戦は無事に終了した。

チェーンソーの回転数を毎秒一回でアイドリングさせ、そろそろ終わっただろう師匠のいる方を向く。一年間の修行で身に付けたスタントの内の一つ、壁蹴りで立ち並ぶ家屋の屋根に飛び乗り、馬力を生かして屋根伝いに移動した。

†††

「よう、待ちくたびれたぜ」

地上五メートルほどから見下ろすソカロ元帥は、いつも装着しているマスクを外して自分の破壊したアクマの上で頬杖を突いていた。何気にこの人の素顔見るの初めてな気がする。派手な刺青（いれずみ）を入れた

額が目を引いた。

俺は飛び降りると、ソカロ元帥の前まで歩いていった。元死刑囚は狂気に口端を歪めながら言う。

「知ってるか？“新人（フレッシュマン）”てぇのには二種類いてなぁ、一人は腰抜けで生き残る奴、もう一人はハイになってすぐ死ぬ奴だ。その顔を見るに、お前ェは後者だろうなぁ。せいぜい気張んな」

「リナリーを残しては死ねないな。ところで師匠、師匠がまだ生きてるってことは、師匠は前者だったってことですか？」

とたんにこっちに向けられる視線が鋭くなる。フフ、ルベリエとさんざんＯＨＡＮＡＳＨＩした俺だ。加えて今は気分が高揚している。それくらいの殺気じゃ動じないぜ。

「フン、どうやら死にてぇらしい……」

「何のことだか」

眼光はみるみる鋭くなる。

「たっぷり“教育”が必要なようだ……。授業料は“三ピース”でいいか？失血大サービスだ」

「ガチホモですか？三回はさすがにキツいな……。ノン気がお好みで？」

あ、大丈夫か？いらんスイッチが入ったような気が……。

「……値上げだ……まるごとバラさねぇと気が済まねぇ……！」

命を賭(と)した追いかけっこが始まったり始まらなかったり。やば、遊びすぎた。逃げねぇと……！

第五刻　鉄の味（後書き）

もっと内容の濃い話を書きたい。

第六刻　帰還（前書き）

ＰＶ７０６１、ユニーク１４４０、お気に入り２６。
ありがとうございます！

久しぶりに帰ってきたり。

第六刻　帰還

もうすぐわたしの八歳の誕生日。今年はロア兄さんは何をプレゼントしてくれるだろう。去年は鳥の彫刻だった。一年間頑張った集大成で、最後にわたしも一緒になってニスを塗った。たぶんあの時一番嬉しかったのは、完成した彫刻をもらったことよりも二人でニスを塗った時間だったと思う。部屋に飾ってある鳥の彫刻は、その思い出を忘れないためのお守りなんだ。

ロア兄さんは毎年わたしの誕生日には帰ってきてくれる。といっても、これが最初の年なんだけど。

「リナリー、いる？」

「いるよ」

婦長さんの声だ。ここに来てすぐの頃、病室の一角に閉じ込められていたけどロア兄さんが来てからそれはなくなって、教団の塔内を出なければある程度外出は許された。婦長さんが言うには、ロア兄さんが偉い人のところに執拗（しつよう）に殴り込んだらしい。しかも毎回ドアを破壊して。それでついに兄さんはその偉い人に“せいやくしょ”というものを書かせて、わたしに“実験”ができないようにしたんだって。

わたしはいつだって兄さんたちに守られてばかりで悔しかったけど、いつかエクソシストになってみんなを守ればいいってロア兄さんは言ってくれた。まだ自分では納得できてはないけど。

「今日、また新しい適合者の子が来るんですって。仲良くしてあげてね」

「ホント！？　やった！」

今度来るのはどんな子だろう。女の子だったらいいな。友達になれるか不安だけど、きっとその子も一人で寂しいはずだわ。わたしがいろいろ教えてあげよう。

†††

「わたしはリナリー！　よろしくね！　あなた女の子？　名前は？」

「うぜェ……」

「えっ……」

「てか俺は男だ、間違えんな」

「う、うん……ごめんなさい。キレイな髪だったから……」

「……チッ」

「……」

名乗りもせずに彼は立ち去っていった。

何なの！？　わたしは普通に挨拶しただけなのに！

「すまないな……ユウは訳ありでな、あまり気にしないでくれ、リナリー」

ほっぺたを膨らましながら新人の子を見送っていると、後ろの方から声がした。振り向いてみると、そこには体の大きな男の人。

「あ、あなたは？」

見上げるほど大きくて、わたしは少し後ずさってしまった。すると男の人はしゃがんでロア兄さんみたいに頭を撫でられた。

「あぁ、ノイズ・マリだ。さっきの男の子、神田ユウというんだが、あの子の兄弟子だよ」

「ふーん、マリさん？　おっきいね、ロア兄さんよりおっきいよ」

そう返すと、マリさんは首をかしげて聞いてきた。

「ロア兄さん？」

「えっとね、ロアルド・シュティール兄さん。二年前にソカロ元帥が連れてきたの。とっても優しいんだよ！　それでね、チェーンソーアートが上手なの！」

わたしが張り切って説明すると、またしてもマリさんは分からないところがあったみたいで、聞き返してきた。

「チェーンソーアートって？」

「来てっ」

口で言っても伝わりにくいと思ったわたしは、マリさんを作品室に案内することにした。作品室は、兄さんの作った彫像が置いてある場所で、昔わたしが閉じ込められていた部屋を使っている。医療班フロアの端っこ、鍛練場に近いから。兄さんは渋ったけど……。

「ここだよ」

マリさんの手を放して電気を点けると、そこには大きな鳥の彫像があった。兄さんが旅に出てから最初の帰省のとき、兄さんの誕生日に二人で作ったもの。わたしが像の完成図を描いて、兄さんがその通りに作ったの。翼をはばたかせて飛ぶ鳥の彫刻。下の方に兄さんの名前とわたしの名前、それに日付が刻んである。八月八日。

とっても立派な彫刻だから、きっとマリさんも気に入るはずだ。

「見て！　すごいでしょ！　わたしがデザインして、兄さんが彫ったの！」

「あ、あぁ。すごいな、綺麗だよ……」

マリさんの様子がおかしい。教団の人たちに見せたらみんな近寄って感嘆の声をあげるのに、遠くを見つめている感じで、まるで本当は見えていないような……。

見えてない？

「マリさん、どうしたの？」

「いや……何でもないよ……素晴らしい、その、作品だ……」

おかしいよ、やっぱりおかしい。

「マリさん、目……見えないの……？」

そう聞くと、マリさんは悲しそうな顔をしてわたしの方を向いて言った。

「すまない、リナリー……。きっと、とっても美しい作品なんだろうな……」

あぁ、この人はやっぱり見えてなかったんだ。

そう考えると、とたんにわたしは悲しくなって、自然と涙が溢れてきた。目が見えないってどんな風なんだろう。ずっと真っ暗なのかな。そしたら兄さんのことも見えなくなるの？　そんなのヤダよ……怖いよ……。

「う……うぅ、うぁっ……」

「リ、リナリー！？　な、泣くな！　大丈夫だから！」

そんなこと言われたって、悲しいものは悲しい。だってマリさんだって昔は見えたはずなんだ。それが急に見えなくなったら、悲しいに決まってる。わたしはしばらく涙を止めることができなかった。

「……リナリーは優しいな」

「……ぐすん」

ようやく落ち着くと、わたしは部屋の中にある作品の説明を始めた。目が見えないマリさんのために触って確かめてもらったりもした。

「それでね、これが一番最初に兄さんが作ったやつ。カラスを作ったんだけど、まだ上手くできなくて、真っ黒い変な物体になっちゃったのよ！」

「ハハハ、確かにこれはひどいなぁ……」

マリさんはずっと笑っていて、わたしも笑ってた。それはとっても楽しい時間だった。

†††

ゴンドラが本部地下の水路を進んでいく。薄暗い中で明かりを提供すべく“焔葬の刃（クレメイター）”をゼロ回転状態で発動する。揺らめく炎が前方を照らした。

「ロア兄さん！　おかえり！」

炎を見つけたのだろうリナリーの声が聞こえた。本当に可愛い妹

分だ。少し進むと、船着き場にリナリーと婦長を見つける。俺はイノセンスを収めて上陸した。

「ただいま」

飛び込んでくるリナリーをしゃがんで抱き止めて、額にキスをする。リナリーは少し頬を赤らめて恥ずかしそうにすると体重を預けてきた。これは抱っこの合図で、リナリーは俺が帰るたびにせびるのだ。もう何なの、この可愛い生き物は！？

リナリーを横抱き（つまりお姫様抱っこ）にして抱えると、婦長に向き直り帰還を告げる。

「ただいま帰りました」

「おかえりなさい、ロア。パーティーの準備はできてるから、着替えたら来てちょうだいね」

「分かりました」

リナリーを抱える腕に力を込め、俺は歩きだした。昔母さんを介護したり患者のベッドの移し替えなんかを手伝ったりしてたせいか、俺の横抱き（つまりお姫――）には定評がある。まぁリナリー限定で。

こうしてるとリナリーが胸板に頬を擦りつけてきて、俺としてはなんだか胸の奥が締め付けられるような感覚を覚えたりするわけだが、逆にこの清楚な可愛いさこそ俺の理性を保たせてくれている。だが、添い寝をねだられたときなんかはマジでヤバい。子どもだから寝る時間早いし、風呂上がりだと幼女のくせに色っぽさが……い、

いや、ロリコンじゃねーよ、ただのシスコンだ。コムイがああなったのにもうなずける。この娘、レディの嗜(たしな)みを知らない状態だと兵器だ。攻城兵器だ。

「兄さんどうしたの？」

ほら、こんな風に抱きかかえられながらの上目遣いとか平気で使ってくるし……。

「リナリーが可愛いくて見惚れてたんだ」

「もう、兄さんてば……」

そして赤面。会うたびに女の子になっていくリナリー、恥じらいはしても反抗はしてくれない。そんな姿がさらに俺の理性を削り取っていく……。

我慢できなくなって頬にキスすると、俺は残り少ないライフポイントを維持すべく前一点を見て歩みを進めた。

第六刻　帰還（後書き）

誕生日は描写しませぬ。

次回はついに……。

第七刻　火葬係の平日（前書き）

ＰＶ９４９８、ユニーク１７６６、お気に入り３３。
ありがとうございます！

前回の後書きで言ってたイベントは、今回は見送りです。

第七刻　火葬係の平日

ロアルド・シュティールだ。今年で十六歳になる。身長はついに百八十センチを超えやがった。これはいよいよ覚悟を決めなければならなくなったということだ。ここで言う覚悟とは、大男ルート突入への覚悟だ。小さいよりいいんだろうが、やはり複雑な心境だ。二メートルは超えないでいただきたい、神に慈悲があるのならば。

黒の教団に入ってもう三年。ソカロ元帥と旅に出て二年たつが、この元死刑囚は一向に俺を解放する気配を見せない。神田は一年で旅は終わって本部勤めだってのに、ソカロ元帥は何考えてんだ？そう思いながら慣れた手付きでイタズラをする。

今日は寝起きにマスクの向きが前後逆になってるのを気付いた元帥から死ぬ気で逃げのびて、今は偶然街で見つけたアクマたちとパーリィしている。

「ていうか師匠の奴、あんなに怒ることねーのに……」

プロレスラー顔負けの凶悪なマスクを被ったソカロ元帥を思い浮かべながら、眼然のボール型アクマに飛び掛かる。街中でひょっとしたらアクマより迷惑かもしれない騒音公害を発生させている手の内の神様を振り下ろした。

ヒュイィィィィィィィ！

「ハッハァー！　まだまだいけるぜ、“焔葬の刃（クレメイタァァァ）”！」

単純馬鹿の叫びとともにレベル1アクマはバラバラに解体された。

残骸の焼ける音に満足しながら呟く。

「火葬係（クレメイター）の仕事も楽じゃねーなぁ」

片付けど片付けど湧いて出るアクマたちに悪態をつきながらも、俺は動くのを止めない。日頃のリアル鬼ごっこにより鍛え上げられた俺の疲れ知らずの肢体が、破壊を求めて疼（うず）くのだ。

敵の動きを注視しながら、押し寄せるアクマどもを足場に飛び移っては切り裂き、飛び上がっては焼き払いのバトルダンス状態。それでも、ときたま現れるレベル2には警戒している。血の弾丸を放つレベル1も厄介と言えば厄介だが、動きが鈍い上に、的が三次元戦闘を繰り返す俺ではまず当たらん。それよか特殊能力持ちのレベル2の方が危険度は大きいだろう。こっちの機動力を低下させる能力があればかなりの脅威となる。

『フヒヒヒ！　死にヤガレ、エクソシスト！』

五時方向にレベル2確認、捕捉。しかし俺の脚は止まらず、十一時方向のレベル1を仕留めに大地を蹴る。飛び上がって天地が反転すると直下、いや直上に来たレベル1をチェーンソーでぶった斬る。回転数を抑えた攻撃で“焔葬の刃”が刺さったまま、勢いで三百六十度回り、レベル2が視界に映ったとたん足裏が爆発した。

“焔葬の刃”の炎とアクマの爆発の相乗作用で俺の身体が一気に前方へと押し出される。後頭部に構えた“焔葬の刃”が炎を噴射し、アフターバーナーのように加速する。俺はレベル2へと突っ込んでいった。

「ヒィィィハァァァ！」

『バァァァカッ！　当たルかよ！』

すると突如レベル２アクマは二つに分身した。鎌のような四本の腕を振り回して威嚇してくるが、ただの威嚇に攻撃力はないので無視して特攻する。

片方を見事に薙ぎ払うが、手応えを残しながらも分身は霞（かすみ）と消えてしまった。

『フヒヒヒ！　ザマァ、偽物ぶった斬りヤガッテ、意味ねーっての！』

かなりのスピードで突っ込んだってのに、なかなか素早い奴だ。しかもあの分身能力、偽物でも斬った感じがした。それはつまり分身から斬られてもケガをするという意味か。厄介だなぁ。

するとレベル２の姿が掻き消えた。俺は瞬時に自分の死角となる場所に一撃入れる。

炎光。

激痛。

「なっ……！」

『だから偽物だっての！』

背中を斬られた。四ヶ所。血が吹き出る。

なるほど、分身を死角に送り、本命は正面からってわけか。さすがはレベル2、心理戦も使ってくる。だが――

「レベル2よぅ、俺は面倒が嫌いなんだ……」

異形のアクマは続けざまに分身を囮(おとり)に攻撃を仕掛けてくる。ときには本体が囮になったりと忙しない。俺は地にしっかりと足をつけて、素早く手数の多い攻撃を掻い潜る。ときどき現れるレベル1を火線を放って撃ち墜とし、アクロバットを交えた派手なアクションでレベル2の注意を反らす。

すると後ろ手に受け止めたレベル2の鎌腕が、破壊の刃と打ち合った衝撃で弾け飛んだ。

パキィィィン！

『アァ？　クソっ、折れちまいヤガッタ！』

「ニィ……！」

体制を立て直そうと後退するレベル2を見て、俺はソカロ元帥直伝の凶笑を浮かべた。二年の師事の内に、自然と身に付いてしまったものだ。まったくあの野郎、戦闘技術だけならともかくも、面倒なモンまで受け継がせやがって。いや、受け継いだのは俺だけどさ。

だがまあ、これで準備は完了だ。レベル2一体に梃摺(てこず)ってると、後でどやされかねん。

いつでも来やがれ。

『フヒヒヒ！　くらいヤガレ！』

「……飛んで火に入る何とやらだ」

真上から三本の鎌で切り掛かってくる。俺はそれを長大なチェーンソーのレールで受け止める。すぐさま横腹を狙う刃の気配が感じ取れた。

「選んでヤる必要はねーわなぁ！」

“焔葬ノ刃”を中心に炎の奔流（ほんりゅう）が巻き起こった。

『アヂヂヂヂヂッ！』

本体も分身もまとめて焼き払っちまえば問題ねぇ。レベル2を舐める業火はその四肢（腕四本だから六肢？）を焼き尽くし、無力化した。俺の身体にはイノセンスの炎が纏わりついていた。

「“火装（ホットアーマー）”ってな」

気性の荒い俺の対アクマ武器らしい機能だ。全身を覆う炎、“攻撃”という名の鎧。いいねぇ、火炙（ひあぶ）りにされてるみたいでゾクゾクする。

これで疲れるのはまだまだ修行が足りないんだろうな。

地に堕ちたアクマを見下す。嗜虐的な笑みを浮かべているのが自分でも分かった。俺は一・三メートルある赤熱する刃を持ち上げ、それを奴の腹に思いっきり振り下ろした。突き立ったチェーンソー

は回転はしていないながらも、刃の発する強大な熱量にアクマのダークマターは浄化されていく。

『グギギッ……！』

「馬鹿野郎が……手間を掛けさせるなよ、お前一人に……」

“焔葬ノ刃”を駆動させる。肉食恐竜の歯のような刃がアクマを貪り喰(むさぼ)っていく。

「大勢待ってるんだからなァ……！」

レベル2を灰も残さず掻き消し視界を水平に戻すと、多数の新手のアクマたちがこちらを狙っていた。

「元帥の来る戦場ってなぁなんでこうも盛り上がるのかねぇ？　鼻歌歌っちまいそうだ」

俺は悲鳴を鳴り響かせながら、再び大群へと突撃していった。

†††

「よう、シュティール。生きてるかァ？」

「師匠、かなり楽しめましたよ。特にレベル2は」

「だろうなァ。お前ェも案外しぶてェし、生きてりゃそこそこいい線いきそうだ」

ソカロ元帥が人を褒めるなんて珍しいこともあったもんだ。まあ俺としても自信はあったしな。リナリーのことで室長たちに意見（半ば脅しだが）できたのも、その辺が関係してるし。

にしても、俺も随分と歪んできたもんだ。ソカロ元帥の戦闘狂ウイルスに感染したのかもしれない。シスターコンプレックス症候群と併発（へいはつ）するとは、リナリーと戦場に出たときはどうしようか。優しいお兄ちゃんキャラぶっ壊れるな……。まあいいや、そんときはそんときで。

「それより腹減りました。どっか行きましょう」

「辛いモン限定だ」

「ハイ、そのつもりです」

俺たちは大通りに向かって歩き出した。

石畳の地面を歩きながら思う。俺も長身と呼べる体格になったってのに、傍らの元死刑囚とはまだ二十センチもの開きがある。埋まってほしくない差だが、こうして見るとこの仮面の元帥の怪獣さが分かる。ていうか戦闘直後の体温上がってる状態でマスク被って蒸せないんだろうか。

そんなことを考えながら周囲の露店を見渡すと、見覚えのあるきらめきが俺の網膜を刺激した。

「あれは！」

俺はすぐさまそのブツの方に駆け出した。

「オイ、シュティール！」

俺の視線が射抜いていたのは、装身具店の店先に並ぶ内の一つ。

「こいつは……」

「兄ちゃん、それがお気に入りかい？　いい仕事してるだろう？
そいつは掘り出し物でね、今なら三ギニーで手を打つぜ。」

店主が商人（あきんど）の笑みとともに値段を言うと、俺は即座に硬貨を握らせた。

「買った！」

「まいどあり！」

手に取ったそれを早速身に付ける。視界に暗色が落とされた。

「なんだ、突然走り出したかと思ったら、ただのサングラスじゃねーか」

「ただのじゃねーっス、師匠。俺にとってのこいつは、師匠でいうところのマスクに当たるんですよ」

遅れてやって来たソカロ元帥にはこいつがどんな品なのか分かってない。

このサングラスはァ、ＨＥＬＬＳＩＮＧのアーカードや、ハガレンのマイルズの掛けている、銀色のフレーム部分がゴーグルみたくなっている丸サングラスなのだ！　一度掛けて見たかった。西欧人になった長身の俺なら十分にこなすことのできるアイテムだ。

それに、ＨＥＬＬＳＨＮＧ的に言えば、戦闘狂に眼鏡（特に丸眼鏡）は必須！　逆光を浴びながら、“焔葬ノ刄”の炎光が反射すれば狂気は五割増し（当社比）だ。

「いい買い物したな」

俺は上機嫌で大通りを歩いていった。

第七刻　火葬係の平日（後書き）

戦闘中の口調がソカロ化していることに気付いていないロア……。

今回はセリフのオマージュがかなり入っています。“焔葬ノ刃”の正体にも関係あったり。

第八刻　再会と会敵（前書き）

ＰＶ１８４２０、ユニーク２８７９、お気に入り６７。
ありがとうございます！

加速度的に上昇しております。

遅ればせながら最新話です。

第八刻　再会と会敵

ずっと君のことだけを考えてきたんだ。君がいなくなって僕は絶望したけど、また会えるって約束したから、必ず迎えにいくって……。

†††

「リナリー！！」

僕は船着き場に着いたと同時に駆け出した。荷物も何もかもほっぽりだして、一目散に君のもとへ。途中何度か躓（つまず）いたりしたけど、医療班婦長の後に続いて走ったんだ。

「リナリー！！」

ドアを開けたそこには――

「コ……ムイ…兄さん……？」

――君がいた。

「リナリー！」

「コムイ兄さん！」

お互い泣きながら抱き合って、名前を呼び続けた。

「リナリー……！」

「コムイ兄さん……信じてた、きっと来てくれるって……。ただいま……！」

「ごめん、ごめんよ……リナリー……。これからはずっと一緒だから……おかえり、リナリー……」

僕たちはしばらく再会の喜びを分かち合った。

†††

「ロア兄さんって？」

僕は聞き慣れない名前にいぶかしげに聞き返した。その間も手はリナリーと繋がっている。少しだけ安心する。

「ロア兄さんはね、わたしを助けてくれたの」

「助けてくれた？」

助けた――それがどういうことか、瞬時に察しがついた。背中に冷たいものを感じる。

室長就任のおり、本部で行われていた“実験”についての資料を渡されて、僕はそれに戦慄した。

――使徒を創る実験。

適合者の血筋の人間を、イノセンスと強制的にシンクロさせるというものだ。“咎落ち”を発生させるおぞましい実験だ。

それにリナリーを強要させられていたなんて……。

僕はリナリーを抱き寄せた。リナリーを安心させたいのか僕が安心したいのか分からないようなものだったけど、そうするしかなかった。

「リナリー……辛かったね。もうそんなこと、絶対にさせないから……ごめんね」

「うん、ありがとう……コムイ兄さん。でもね、ロア兄さんが助けてくれたから大丈夫よ」

リナリーは顔を上げて僕の方を向いた。久しぶりに見る上目遣いがたまらなく可愛くて、思わず髪を撫でてしまう。

「ここに来て何ヵ月かしてね、ロア兄さんが……えっと、ロアルド・シュティール兄さんが入団してきたの。エクソシストよ」

その名前を聞いて少しびっくりする。彼の対アクマ武器のコンセ

プトデザインを担当したのが僕のチームだったから。

僕は話を中断させることはせずに、リナリーの髪を撫でながらじっと聞いていた。

「それでね、婦長さんがとりはからってくれて、ロア兄さんと会ったの。わたしのこと聞いて、コムイ兄さんが来るまで代わりに兄さんになるって言ってくれたのよ。その日も“実験”はあったんだけど、身体を張って守ってくれたの。コムイ兄さんみたいに……」

「そっか、じゃあ帰って来たらお礼を言わなきゃね」

僕はまだ見ぬ弟分に感謝の念を送り、リナリーを開放した。額に小さくキスを落とす。

「えへへっ、ねぇコムイ兄さん」

「なんだい、リナリー？」

可愛く微笑むリナリーの手にもう一度触れながら、僕は優しく返した。

「見せたいものがあるの、ロア兄さんと作った彫刻！　来て！」

「分かったよ」

ベッドから飛び起きた愛しい妹は、僕の手を引いて駆け出した。

†††

「あんたは……」

「君が……」

リナリーとの感動の再会をしてから数ヶ月後、ようやくロアルド・シュティールと面会する機会を得た。新しい適合者のスーマン・ダークがソカロ元帥に師事することになったため、元帥も長期にわたって同行させていたロアルドをしぶしぶ開放したのだ。そしてスーマンが寄生型の適合者であったことから、ロアルドだけが本部へと帰ってくる――

――はずだったのだが。

「ロア兄さん！」

「リナリー！　もう外に出て大丈夫なのか？」

ロアルドは道中遭遇した敵との戦闘で負傷し、最寄りの病院に入院しているというわけだ。

「帰り道でアクマを連れた褐色野郎にあって……ってその格好は……」

「新任室長のコムイ・リーだ。リナリーの実兄だよ」

自己紹介すると彼は肉付きのいい身体をベッドから跳ね起こして、

目を見開いていた。蹴飛ばされたシーツの音が静かな病室で耳についた。

「コムイ兄さんがね、会いに来てくれたの！　ロア兄さんの言った通り！」

僕はリナリーの頭を撫でると、帽子を取って恩人の方に向き直った。

簡単に、けれどありったけの感謝を込めて言った。

「今までリナリーを守っていてくれて、本当にありがとう」

「こんなとこまでわざわざ足を運んだのはそのためか……。いいって、気にすんなよ。俺だって可愛い妹分ができて楽しかったし、これからも兄貴分でいるつもりだしよ。あんたの弟分になる気はねーけど……」

剛健な見た目の割に穏やかな口調で返されて少し驚きながら、僕は帽子を被る。

「ロアルド――」

「ロアでいい」

「じゃあロア。君が出くわした褐色の男について聞きたいんだけど……」

「あぁ――」

彼はベッドの上であぐらをかいて話しだした。

「――スーツ姿にシルクハットの顔のいい野郎だった。名前はティキ・ミック、年齢はおそらく二十歳過ぎ。褐色肌に額の十字の痣、おまけにノアの能力とかいったか、イノセンス以外の万物を透過、拒絶する特殊能力持ち。主な攻撃手段は能力と食人ゴーレム（キャニバル）」

淡々と報告される内容に、僕はゾクリとする。彼らがこの聖戦に――

「後ノアの能力でもう一つあったな。イノセンス破壊、俺の“焔葬ノ刃（クレメイター）”もぶっ壊された。なぜかすぐ再生したが……いや、生え替わったというべきか……」

「なんだって！？　君のイノセンス破壊されちゃったの！？　て言うか生え替わったって……！」

イノセンスの自己修復は不可能ではないけど、そんな短時間でできるものでもない。まさか、彼のイノセンスが“ハート”なのか……？

「前から思ってたんだ……なんか物足りねーって。なんか違うんだよ。こう、おぼろ気に懐かしさはあるんだけどなぁ……もしかしたら今の“焔葬ノ刃”は本来の形じゃないのかもしれない……適合者としてはそんな気がする」

何かを思い出すように視線を泳がせて言い放つロアを見て、僕は顔を伏せる。

それから少しリナリーに構ってあげてから、再びロアに視線を戻

し言った。

「まぁ、何はともあれ無事だったんだし、よかったじゃない！　今は傷を治すことに専念して、ゆっくり休んでよ。――あぁそうだ、本部に帰ったらリナリーの修行に付き合ってくれないかな？」

「手前ェコムイ、休めって言ったそばからそれか……。それと言っとくが、今回は殺り合ったのが俺だったから生きて帰れたけど、生半可な連中だと束でかかっても全滅するぜ。他の連中にも伝えといてくれ」

ソカロ元帥オーラが滲み出てるよロア……！

「そ、そうかい……僕の方でもいろいろしてみるよ。じゃあ、僕は一足先に帰るね。リナリーをよろしくっ」

そう言って僕は護衛を連れて病室から立ち去った。

第八刻　再会と会敵（後書き）

次回はティキぽんとの戦闘です。

第九刻　創痍の鎖剣（前書き）

ＰＶ２６４２３、ユニーク４０１３、お気に入り９２。
ありがとうございます！

ティキぽんとロアルドの邂逅です。

第九刻　創痍の鎖剣

ありえねぇ、マジねぇって……。

「お初〜、エクソシスト」

目の前には複数のアクマを従えた褐色肌の青年。パーマのかかった黒髪を風にはためかせながら、飄々（ひょうひょう）とした態度で話し掛けてくる。左目の泣き黒子（ほくろ）と、シルクハットから覗く額の十字の痣がその青年の正体を物語っていた。

ティキ・ミック、ノアだ。

「千年公のお使いの帰りにエクソシストとバッタリって、ありそうでないことのようだったけど、案外あるもんなんだな」

シルクハットのつばをつまみながらニヒルな笑みを浮かべて言う姿がいやに様になっていて、こめかみがわずかにひくついた。

「ウゼェ……」

すぐさま腰のホルスターから“焔葬ノ刄（クレメイター）”を引き抜き、居合いの要領で炎の剣気を放つ。

“火箭（ヒートアロー）”、その名の通り火矢を発射する技、と言うか機能だ。高速の炎が走り、アクマたちを捉えると爆炎となって夕闇を照らした。

「汚ェ花火だ……」

某戦闘民族の王子の捨て台詞を吐き捨てて、金切り声を発する相棒を肩に担ぐ。あ、よく考えてみれば俺も戦闘民族の王子（虎の子）だわ。

「気の早い奴……あーあ、こりゃ千年公に怒られるわ。責任とれよ」

「お前こそ、これまで犯してきた女どもに責任とれよ」

店じまいの済んだ大通りでいまだに余裕を見せるティキ・ミックに言い返す。

「いや、合意の上だから。俺は紳士だ、女を犯したりしねーよ」

「じゃあ男は犯すんだな、寒気がするぜ……。俺も気を付けねーと」

「おちょくってんのか……」

ソカロ元帥との旅で磨かれた俺のからかいスキルに、ティキ・ミックの表情は固くなる。ビキビキと青筋が浮かんできそうな雰囲気だ。

丸サングラスの奥の目を細めながら、俺は“焔葬ノ刃”を構える。邪魔者はいない、一対一で殺り合える。三日月状に口を歪めると、石畳が砕けるほどの勢いで飛び掛かった。

「シャハァァァッ！」

ティキ・ミックは目を見開き、神速の斬撃を食人ゴーレム、ティーズで受け流す。長大なチェーンソーを力任せに振り回し、袈裟、逆袈裟、真一文字と連撃を叩き込めば、触れたところがわずかに削ぎ落とされていく。

一刀両断とばかりに真上に振りかぶると、俺の一撃の速さと重さを覚悟したティキ・ミックは両腕に備えたティーズの刃を交差させた。

「Ｉ　ｇｏｔ　ｉｔ．（もらったァ）」

振り下ろす瞬間、“焔葬ノ刃”の悲鳴が、一気に数オクターブ駆け上がったかのようにキーを上げた。

キイィィィィィィィ！

褐色肌に一滴危機の色が落とされるがもう遅い。

ティキ・ミックはとっさの判断で渾身のバックステップを踏み、俺の攻撃を避けようとする。そうはさせまいと全身の筋肉を収縮させて超速の面を放った。破壊の刃と炎が疾風にすら勝る速度で奔り、敵を焼き尽くさんと牙を剥く。

しかし振り抜いた先に見えるのは陽炎と消えるティーズ。どうやらなんとか躱したらしい。

――初撃は

「オモシロイ……！」

高速回転する赤熱刃が地面を切り裂き、炎が溝をグリップする。一瞬だけキャタピラのように加速し、俺の身体は強烈な重力加速とともに前へと押し出された。

ステップで滞空しているティキ・ミックのもとへと、一直線に突き進む。

「アリかよ……」

常識破りな加速で予期せぬ突撃を食らって、ほうけた顔をするノアの男。俺はそのやたら整った顔面に向かって猛（たけ）る刃を突き出した。

これぞ本命の一撃。奴の筋力では躱せまい。必殺を確信しながら腕を突き出した。

「ニィッ……」

にもかかわらず、奴は笑っていた。冷徹な、真っ黒い笑み。

瞬間、光が眼前に満ち、ティキ・ミックの姿を見失う。気付いたときには遅かった。

少しだけ視線を下にやれば、ボロボロの黒服を着たティキ・ミック。その手はそっと、“焔葬ノ刃”の基部に添えられている。

――鈍い音

――破片

纏っていた炎が消え、根元から真っ二つになった俺の対アクマ武器。

俺たちは掴み合いながら落ちていった。

「勝負ありじゃね？」

俺は地面に叩きつけられ、ティキ・ミックはそんな俺に馬乗りになって心臓を掴んでいた。しかしそれでも、俺は“焔葬ノ刃”を手放すことはしない。こいつは相棒だから、いつだって俺の求めに答えてきてくれたから。確信があった。こいつは俺がここでくたばることを容認しないと。

冷笑を浮かべるティキ・ミックをサングラスのなくなった裸眼で睨み付ける。

「ティーズ……」

「当ったり、さすがにあの時はヒヤッとしたぜ。まぁ、エクソシストとしてはよくやった方なんじゃねーの？」

「うっせぇよアウトロー」

あの時ティキ・ミックはティーズに自らを攻撃させ、俺の突きを躱した。体重のある俺を攻撃しても効果は薄いと考えたのだろう。そして俺の対アクマ武器を破壊した。まったく敵ながら凄まじいセンスだ、クソ野郎めが。

「フン、土産話のついでだ。名前くらいいいだろ？　俺はティキ・

ミック、ノアだ。お前は？」

「ロアルド・シュティールだ、ミッキー」

「誰がミッキーだっつの」

話している内に口端が釣り上がってくる。“焔葬ノ刃”のささやきが聞こえるのだ。ゾクゾクするね、極限状態ってやつ。

そんな俺を奇異の目で見つめるミッキー。

「死ぬの怖くないわけ？」

「全っ然……だってなぁ――」

俺は右手に握るグリップにこれでもかと力を込める。

「――死なねェから」

ヒュイィィィィィィッ！

破壊された基部から突然生えた歪（いびつ）な形の刃で、心臓を掴むティキ・ミックの右手を奪いにかかった。

「くっ！」

「ハァ、ハァ……！」

ティキ・ミックはとっさに手を引き抜き、俺と距離をとった。喉奥から血がせり上がってくるのをそのままに、俺は立ち上って再び

火を灯した“焔葬ノ刃”を構える。

「まだまだいけるぜ、ミッキー……！」

「ミッキーじゃねぇって」

それからしばらく膠着状態が続いていたが、突然ミッキーは悔しそうに頭を掻くと背を向けて歩き出した。

「……やめた。ったく、今日は俺の勝ちな。続きはまた今度――」

「あぁん？　引き分けだろーが、勝利宣言は殺してからにしやがれ」

「ハァ、血ィダラッダラでよく言うぜ」

「失血量はお前の方が多いだろーが」

しばらく軽口を叩いてから、ティキ・ミックは姿を消した。いつの間にか暗くなっていた大通りを見渡し落とした丸サングラスを拾い上げる。

「内臓やっちまったか……」

ゴーレムを通じて一方的な負傷報告を済ませると、俺はボロボロの“焔葬ノ刃”を担いで歩き出した。

第九刻　創痍の鎖剣（後書き）

火箭（かせん）とは火矢のことです。

第十刻　退魔師の覚悟（前書き）

ＰＶ４９１３６、ユニーク８１３６、お気に入り１３４。
ありがとうございます！

遅れました、十話です。

第十刻　退魔師の覚悟

ロアルド・シュティール。今年で十八、原作五年前。身長は百九十センチだ、まだまだ伸びるぜコンチクショウ。

かのガングロ野郎が俺の相棒を粉々にしてくれやがったのが半年ほど前。コムイが室長になってリナリーが完全に自由になり、それから俺が療養がてら修行をつけている。

「どう、ロア兄さん！？」

「また成長したなぁ、正直嫉妬するくらいだよ」

しかしいざ修行となるとリナリーは凄まじいセンスを発揮し、体操技術は瞬く間に俺を抜いていった。今だって鍛練場を駆け巡って舞いを披露する。そこには俺の力任せの戦舞とは違う、流麗な美しさがあった。

まだ十一歳の、少女というより幼女と呼ばざるを得ない容姿だが、その精神と技量は目を見張るものがある。まさしく天賦の才だ、俺のような凡人とは違う。まあ俺も他のエクソシストと比べれば一線を画する実力があると自負してはいるが、それは単により自分のイノセンスを知り、その求めるものを知っているからにすぎない。今持つアクロバットも時間と経験によって磨かれてきたものだ。

リナリーが特定の元帥に師事しないのは、他ならぬコムイの……

いや、コムイと俺の計らいによるものだ。ソカロ元帥に師事して俺みたいに戦闘狂がうつってはことだし、クラウド元帥に憧れて色気を振りまくような少女に成長してもらっても、俺たちの方が我慢できない。イエーガー元帥はもう歳だし、ティエドール元帥に師事すると神田のガキとの縁が無駄に強くなる。ちなみにこれは俺の意見だ。また、クロス元帥は候補に入れることすらしていない。

俺たちが例外的措置を提案して、リナリーがそれに快く乗ってくれたときは兄として非常に嬉しかったのを覚えている。そしてリナリーの師匠は暫定的に俺が務めることになった。俺は臨界者でこそないが、ノアを撃退したエクソシストとしてそれなりに認知はされている。兄貴分でもあるから、リナリーの師匠として相応の“格”があったってわけだ。

“焔葬ノ刃（クレメイター）”を立てて体重を預けながら、鍛練場の端の段差から尻を浮かす。傷はとうに癒えている。俺は立ち上がると、視界に入った神田に大声で声をかけた。隣にはマリがいる。

「神ァ田！　ちょっと遊ばねーか！」

目だけこっちに向けると、神田は露骨に嫌そうな顔をして舌打ちをした。心なしかマリまで表情が暗い。

リナリーはいち早く耳栓をしていた。

「チッ……」

「なんだなんだ、ご挨拶じゃねーかユーくん？」

「テメェ……！」

俺の挑発にイノセンスの発動で答える神田。短気で御しやすい。俺はジョニー特製のファイアパターンのバンダナを頭に巻くと、イノセンスを発動させる。カシュンという音とともにレールが生え、肉厚の刃が炎を纏う。リナリーがマリの手を引っ張って段差に座る。マリも渋ったものの、リナリーの嬉々とした表情にあっさり陥落した。

対人戦に血がたぎり、口元が否応なしに釣り上がる。赤熱刃が回転を始め騒音が屋内に鳴り響くと、視界の隅で耳を押さえるマリが見えた。何コレ面白い……！

鍛練場にいる他の連中も耳を押さえるなり避難するなりして俺のイノセンスの音から身を守る。神田もかなり堪えているようだ。少し大げさな気がする、俺には喘声にすら聞こえるというのに。

お互い構えに入ったところで、俺の足裏が爆ぜた。

†††

「コムイ……」

「なんだい、神田くん？」

螺旋階段を降りて科学班ルームにやってきたのは、いつも仏頂面の神田くん。手には袋を持っている。珍しさからか、科学班員の何

人かが視線を飛ばした。袋には何かとがったものが入っているのようで、トゲトゲとした突起が目につく。気になって、僕は判子(はんこ)を押す手を止めずに聞く。

「その手に持ってるものは何かな？」

「六幻だ……」

カッチーーーン……

部屋の空気が瞬く間に凍り付いた。皆一様に真っ白になり、書類を運ぶものの手からは書類がこぼれ落ち散らかった床に白い山を築いた。判子を持つ手がフルフルと震える。

「ロアルドにぶっ壊された」

ピシッ……！

部屋中で握られたペンが破砕音を上げる。
そして皆の口から同一の叫びが発せられた。
「「「またアイツかぁぁぁあ！！」」」

†††

『ロア！』
「リーバーか。どうした、楽しそうだな」
『どこがだ！』
外で彫刻をしていると、ゴーレムからリーバー班長の声がした。
“焔葬ノ刃”の回転を止め、作りかけの蛇を見ながら答える。
「怒るなよ、あれは折ったんじゃなくて折れたんだ。誰のせいでもないさ」
『折れたんじゃなくて粉砕したんだろお前がっ！　人の仕事増やして、一人だけ呑気に遊びやがって……。こっちは四六時中忙しいってのに――』
「仕事のできる奴はそれだけ上がりも早いのさ」

『俺たちの仕事に終わりはねーんだよ！』

なんかだんだん説教から愚痴に変わっているような……。

「だがリーバーはまだいいじゃないか。こうして愚痴をたれる時間があるんだから」

『テメェ！　そんな暇ねーよ！　ってそんなことはいい。室長が逃げ出したんだ、捕まえてサボらないように見張っててくれ。　せめてこれくらいはしろよ！』

「分かったよ、ウサギ狩りだな？　任せとけ」

『狩るんじゃねーって、捕まえるんだよ』

「そうか、デッド・オア・アライブ（生死問わず）ってやつだな。得意分野だ」

『コムイ室長、俺は何も悪くありません』

俺は歩きだした。

†††

通信を切ると俺はベンチにもたれかかった。ろくじゅうごがコーヒーを持ってきてくれる。しばらくすると破砕音が聞こえてくる――

「――破砕音？」

ガガガガガガガガガッ！

「いやな予感が…」

バタンッ！

「リーバーくぅぅぅんっ！」

目を右に動かすと、我らが室長（サボり魔）コムイ・リーの姿が……。聞かなくても何となく分かる顛末（てんまつ）に頭痛が痛くなる気分だ。

ていうかまだ三分もたってないんだが……。相変わらずロアの持つソカロ元帥譲りの勘（かん）は凄まじい。“全てを受け継いでしまった”とはよく言ったものだ。シスコンと獣が合わさると時に手が付けられなくなる。リナリーと任務に出るとリナリーは必ず無傷ってほどだ。

まあそれはともかくとして、火の点いてしまった彼をどーするかだ。

「兄上ェ？　逃げるなよ、リーバーから指名手配受けてんだ。手前ェの首がねぇと納期遅れちまうんだからな……！」

「指名手配って何！？　納期って何、僕の首の納期！？」

ロアをなだめるのはかなり手間のかかる作業だ。基本的に彼は一途に一つのことをこなすタイプで、それは戦闘でも彫刻でも変わら

ない。しかし目的と行動で動く合理的な部分と、愛と冗談で動く情緒的な部分とが時に化学反応を起こすのが玉に瑕(きず)だ。そうなるとリナリーを呼ぶしかない。

ということで、俺は城内放送でリナリーを呼び出すことにした。

†††

「ロア兄さん、めーよ」

「次からは気を付ける」

「ほ、ホントだよ！　僕なんて前髪焦げたんだから！」

「コムイ兄さんもサボっちゃめっ！」

今俺は不思議なものを見ていた。リナリーが来て二秒で我に帰ったロアと、土下座していた室長が〇．二秒で立ち上がって皆でリナリーの容れたコーヒーを飲んでいるのだ。ろくじゅうごの容れたコーヒーはコムイ室長が全て飲んでしまった。

一息付いたところで、コムイ室長が判子を押しながらロアに言う。

「そうそうロア君、最近リナリーも力付いてきたと思うし、今度簡単な任務にでも連れていってあげてくれないかな？　ソカロ元帥の実戦主義で叩き上げられた君なら上手い具合にリナリーを馴らして

あげられると思うんだけど……」

ロアは少し考えてから答える。リナリーが隣でロアをどこか不安げに見上げている。

「リナリーの返答次第だな。エクソシストとしての見解を述べるなら、今すぐに実戦に出してもレベル1相手なら十分通用するはずだ。まあ、万全を期すなら今後最低でも半年は監督すべきかね」

「そうか……」

ここでコムイ室長はまた少し考えて、リナリーに質問した。俺も化学式に目を戻す。

「リナリーはどうしたい？」

リナリーは可愛らしく座り直してハキハキとした声で言い放った。

「――私も戦いたい、兄さん。私は今までずっと守られる側だったから……でも、今の私はアクマをやっつけられる力がある。なら、私もみんなを守るために戦いたいの！」

そのしっかりした声に、部屋中の目がリナリーに向いた。俺も不覚にも顔を上げてしまった。あぁ、いつの間にリナリーはそんなに大人になったのか……。

過保護兄二人も呆気にとられているようだ。しかしその後の対応はかなり違っていた。

「そっか、リナリーがそう決めたなら僕は全力で応援するよ。にし

ても、こんな小さな娘にこんなこと言わせたら、大人として反省したくなるな……」

「自分でその道を選べたのは大きいぞ、リナリー。今よりもっと強くなりたいならイノセンスを求めろ。イノセンスにも意思があるからな、求める心と覚悟がリナリーをエクソシストであらせてくれる」

どちらがどちらかは言うまでもないだろう。どちらにせよ、二人とも歓迎していた。同時に心配も。

キラキラした目で兄貴両名を見つめながら、この日リナリー・リーは“エクソシスト”となった。

.

第十一刻　六条火（前書き）

ＰＶ５４９７８、ユニーク８８３５、お気に入り１４５。
ありがとうございます！

ついに臨界点突破です。後書きにソース載せときます。

第十一刻　六条火

.

排除

ヒュイィィィィィィ！

排除、排除

ギャアァァァ！

排除、排除、排除

「排除、排除、排除、排除、排除……」

リナリーを連れて任務に行くようになってから二年ほど、俺は十九歳になったのだが、最近やけにアクマどもの襲撃に会う。同行した探索部隊（ファインダー）がことごとく殺され、一部から“死神（アッシュメーカー）”とか呼ばれているのだ。敵は対アクマ武器で灰になり、味方は押し寄せるアクマの砲撃で灰になる。そういう意味らしい。

今日も今日とてアクマ退治、毎度予測される数を上回るアクマたちの言動から俺を狙って来ていることが分かって、探索部隊は連れていない。今までリナリーを連れててもなんとかなってたからよかったが、今日は一味違う。いつもに増してアクマが多かった。

「死ねぇ、エクソシ――ギャアァァァ！」

レベル1は瞬殺。レベル2も秒殺。レベル3が来ていないのはありがたい。

俺はリナリーに回るアクマが少なくなるように群れの中心に向かって突撃していった。

「キリがねぇや。ゲームならニューレコードだぜ」

視界に入ったものから斬る、焼く。見敵必殺（サーチアンドデストロイ）とはこのことか。

“焔葬ノ刃（クレメイター）”の凶音に、共鳴するかのごとくアクマの断末魔の叫びが響く。俺が駆けた後に残るのは灰になったアクマたちだけだ。ソカロ元帥と違って俺は血を浴びるのは好きじゃないが、アクマたちの焼き払われる様を見るのはとても心地よく感じる。自分の中の汚い部分が洗い落とされたような気分になるから。

「シャハァァァ！」

ボール型のレベル1にチェーンソーを突き立て、引き抜きざまに地上のレベル2に飛び付く。その間にも近くのアクマを“火箭（ヒートアロー）”で灰にしていく。直後、まともな抵抗もできぬままにレベル2は斬り捨てられた。高速回転する炎の刀身は、あまりの切れ味にもはや手応えすら掻き消す。

一秒も立ち止まることなく、俺は次なる標的に飛び付いた。

「もう百くらい殺ったかァ？」

立ちふさがるアクマはことごとく灰にしながら、ずんずんと奥に

進んでいく。

「ん？　あいつは……！」

アクマの中に人影を見つけた。

「黒服にシルクハット……」

俺は狂喜に口端を歪め、近くのアクマを焼き払いながら視界に捉えた長身の男に猛スピードで突っ込んでいった。

「久しぶり、エクソシスト」

振り返ったノア、ティキ・ミックを見て俺は驚愕した。

その腕には――

「可愛い娘連れてるじゃん。弟子ってやつ？」

「リナリー……！　手前ェ！」

「…ロア兄さん……」

――目に涙を浮かべたリナリーが捕らえられていた。

「そう怒んなよ、珍しいから捕まえただけだっての。何もしてねーよ……まだな」

「汚ぇ手でリナリーに触んな、ガングロ。灰にすんぞ……！」

「おー怖っ」

周りのアクマがケラケラと笑う。瞳はガングロ野郎を睨み付けている。俺は脚に力を入れた。

「おっと動く――」

ギャアァァァ！

「――なって言おうとしたんだけどな……」

眼前のノアが言い終わる前に、炎の剣気でアクマを破壊して見せる。

脚に込めた力を開放し、一直線に懐に飛び込んだ。

「相変わらず人の話聞かねー奴だな。そんなにこのロリっ娘大事なわけ？」

「殺す殺す殺す」

「はぁ……」

人質を連れた奴に喋る時間を与えると、喉元にナイフを突き付けかねない。こいつの場合心臓を掴み取るわけだが。

ティキ・ミックは右手に備えたティーズで“焔葬ノ刃”の応酬を受け流そうと画策するものの、破壊の権化（ごんげ）の前にティーズは次第に崩れていく。

「しゃーない」

突発的に空間に充満する気配。俺は一気に十メートルほど後ろに下がる。爆転で降り立つ間に、大量のティーズが髑髏(どくろ)の口に光を収束させるのが見えた。

「ぐはっ……！」

「先制点は俺かな」

ティーズから放たれた光線が身を焼くのを感じた。久しぶりの痛覚に視界が揺らぐ。“火箭”を放つ頃には散開していて、撃墜効率はあまりよくない。

「お前ってさ、直情的で行動が読めるんだよね。もうちょい頭ひねったほうがよくね？」

「うるせーよ学なし、俺は元外科医志望だぞコラ。お前ェの予想なんざ超えてやるさ。“焔葬ノ刃”はハイスペックな対アクマ武器だからよ」

言い終わると同時に炎を纏う。まるで団服が燃えているように見える。“焔葬ノ刃”の第二解放、“火装(ホットアーマー)”。俺が敵意を持つもの全てを焼く炎の鎧だ。

「火じゃ光は防げない」

「俺はインファイターだ。リナリーは直接この手で取り返してやる」

再び突撃を開始する。ジャンプの瞬間“火箭”を放ち、ティーズ

を墜とす。爆烈焼夷弾ばりに炎が広がっていった。

斬り掛かったところを変形させたティーズで受け止められる。入れ代わり斬り付ける刃にティーズは削り崩されて燃え尽きていくが、ティキ・ミックは次なるゴーレムを武器へと転換（コンバート）させて戦闘を続行する。

チェーンソーを振り抜いて跳び箱の要領で相手の上空を飛び越えた。すれ違いに“焔葬ノ刃”を交えるが防がれる。後ろをとって逆袈裟に斬り上げようとするもリナリーを盾にされては攻撃できない。

一瞬の攻防の後に俺たちは互いにバックステップで距離をとった。

「男らしくねぇ」

「そのための人質だろ？」

「情けないミッキー」

「ミッ……！」

「夢と魔法の国へご招待だ！」

俺は三度突撃し、神速の突きを放つ。注意の反れたティキ・ミックはそれをギリギリで躱す。

「この程度で隙ができるようじゃペッ！」

「なっ、きったねぇ……てアッツ！」

俺の吐いた唾(つば)が頬を打ち、またしても隙のできたところを“焔葬ノ刃”がかすめる。

「話の途中で奇襲は来ないとでも思ったか三下ァ！」

焦げ付いて歪んだ顔に怒鳴る。威嚇の意味合いも含まれた気合い張りだ。腕の中でぐったりしているリナリーを見ないようにする。見れば隙になるからだ。

「お前の方が男らしくねぇよ！」

「“戦い”で気ィ散らす方が“漢(おとこ)”じゃねぇ！」

回転数をどんどん上げていく。競り合いの中で、ノアがリナリーに触れていることへの憎しみを戦いの快楽に無理矢理変換してイノセンスの欲求を満たしてやる。そうすることでシンクロ率を上げているのだ。反面フィードバックである過度のストレスは、リナリーへの愛情で押さえ付けた。

歯を食い縛りながら斬撃を繰り出す。サングラスの中で目をいっぱいに見開き、愛しい妹分を呼んだ。

「リナリー……！」

「欲しいならやるよ」

すると唐突にティキ・ミックはリナリーを抱えた左腕を振った。小さく悲鳴を発しながらノアの後方に飛んでいくリナリーに不覚にも目がいって、反応が遅れる。

「よそ見っ！」

「……チィッ！」

なんとか首をひねって致命傷は免(まぬが)れるが、左肩を裂かれた。

ティキ・ミックの愉悦のさした表情がカンに障(さわ)る。

「俺に構ってていいのかよ。あのロリっ娘、死ぬぜ？」

「手ん前ェ！」

再度リナリーの方を見ると、アクマたちの砲身がリナリーに向いていた。やらせてたまるかこの野郎！

“この世界”で一番大切な存在なんだ。俺がいなければ死ななかっただなんて、俺のせいで死ぬだなんて、絶対認めねぇ！

今から行って間に合うか？

間に合うさ、あいつの狙いは俺なのだから。

長大なチェーンソーを肩に担ぎ、その刃の纏う炎を爆発させる。俺の身体は一気にトップスピードまで加速し、リナリーもとへと突き進む。ティーズが無防備な腹を抉(えぐ)り血が吹き出したが気にしない。この身は盾となる運命(さだめ)だ。

リナリーを庇えばアクマの凶弾に、ついには己が身を灰にすることになるだろう。

上等だ、もとより一度死んだ身。死など今さら怖くはない。所詮“前”と同じだ。

血の滴(したた)るのを微塵も気に留めず、俺はリナリーとアクマの間に滑り込む。肩にはオレンジに煌(きら)めく対アクマ武器、“焔葬ノ刃”を担ぎ、大きな身体をリナリーに被せた。

「ロア兄さん……」

「……愛してる、リナリー」

驚いた表情のリナリーにささやくと、ふと視界が揺らいだ。

あぁ、泣いてるのか、俺は。そう言えば泣くのは“あの日”以来だな。痛みも悲哀も、久しぶりだ。

ゴーグル型のフレームが涙を受け止め、リナリーの頬を濡らすのを防いだ。この娘は優しいから、俺が泣いたと知ればずっと自分を責め続けるだろう。でも、よかった。

「撃ち方、始め」

ティキ・ミックの声が聞こえ、その直後に砲声が轟いた。

†††

――暑い

――熱い

――刻まれた傷でもない

――身を包む炎でもない

――ましてや悲しみや憎しみでもない

――魂……そう、魂があつい。焼かれるようで、燃え上がるようで、ただくすぶってるだけの情けなさのようで……

――温(ぬる)い……

――温すぎる……

――なんか違うんだよ。違うんだ、そうじゃないんだ

――俺が求めるものは、俺のイノセンスが求めるものは、こんなんじゃない

――俺はこんなんじゃない

――熱い……

――違う。“盾”じゃないんだ、“刃”は……

――熱い……

――“刃”は“盾”ごとぶった斬るためにあるんだ。それでこその“刃”

――「その炎と刃をもて、未来を切り拓く明星（みょうじょう）となるだろう」

――なんとなく、分かる気がする。

――そう。熱い、だが心地よい熱さだ……

――知ってる、懐かしい熱量

――全てを焼き尽くす“暴力”

――「Ｍｙ Ｇｏｄ（神よ）……」

――運命、あいつの言っていた“運命”……

――あの時、“焔葬ノ刃”が壊された時と同じだ。なんとなく、知っているような……

――運命を破壊し、その瓦礫（がれき）を切り拓くための“運命”……

――「Ｉ ｒｅｍｅｍｂｅｒｅｄ（思い出した）……」

†††

断続的な砲声が三ダースほど“聞こえ”てから、「撃ち方、止め」の声が“聞こえ”た。

濃厚な毒の煙と気配の中、額に一瞬温もりを感じる。

そのキスで腕の中の小さな“炎”がまだ灯っていることを理解し

た。

「ロア兄さん……」

愛しい声、体温。同じところに唇を落とす。

そして自らを覆い、煌々（こうこう）と赤く光を発する六条に全てを理解した。

「“運命”、そういうことかい……」

右腕を一振り、劫火（ごうか）がアクマを凪ぎ払った。毒の煙すら焼き尽くし、仇敵の姿を目に映す。

「思い出したよ、全て……」

背中に背負った太いチューブで繋がった左右二つの排炎器。重機のようなアームで右側は右腕の直方体の基部に、左側は左肩の装甲に接続されている。基部は甲から稲妻をほとばしらせ、赤の六条――二列横隊に並んだ六つの長大なチェーンソーを携（たずさ）えている。

オーバード・ウェポン、赤熱六連チェーンソー。対アクマ武器、“焔葬ノ刃（クレメイター）”の真の姿があった。

第十一刻　六条火（後書き）

主人公の対アクマ武器の元ネタ

http://www.armoredcore.net/ac5/

第十二刻　元帥候補（前書き）

ＰＶ８５９９６、ユニーク１４２９５、お気に入り２０１。
ありがとうございます。

ようやくラビとブックマン登場です。次回あたりから原作入ります。

第十二刻　元帥候補

.

――“焔葬ノ刄（クレメイター）”

――俺の対アクマ武器

――火を司るイノセンス

――赤熱する鎖鋸

――そして……

「…オーバード・ウェポン」

振り上げる腕に連動して、基部に接続されたアームがフレキシブルに動く。二列横隊に折り畳まれていた六本のチェーンソーを一列に広げ、さらにそれぞれの間にある関節を曲げて円筒形に変形させる。丁度中心をくりぬいた＊（アスタリスク）のような形になる。

「待たせたなァ、兄弟」

先ほどの涙もとうに乾き、俺は狂喜の笑みを浮かべて“焔葬ノ刄”をスタートさせた。

ギュイィィィィィィィィィィ！！

あぁ、心地いい……。やはりこれに勝る音はない。俺の上半身ほどもあるゴツい基部が、稲妻を奔らせながら円筒形に配列された六本のチェーンソーをドリルのように回す。同時に炎を纏う鋸の刃が超速で回転を始めた。

猛る破壊の七重奏に精神を高揚させ、そのまま俺は内包していた熱量を一気に開放した。

炎の衝撃波が大気を焼き、アクマたちを巻き込んで破壊していく。それはさながら悪魔を火刑に処する天使の輪だ。

「ハァ……ハァ……はっちゃけすぎたか……？」

爆心地の半径五十メートル圏内は何も残っていない。地面は内部まで火が通っているようで、表面は焦げ付くどころか石畳の一部がガラス質に変化していた。半端ないな……。

当然だがティキ・ミックもいない。死んだとは思えないからどうにかして撤退したんだろう。

リナリーを探すと、俺の腰辺りに抱きついていた。呼びかけると顔を上げて、不安そうな目を向けてくる。

「ロア兄さん、血……」

リナリーの頬に着いた血痕に自分の状態を思い出す。そう言えば腹を斬られたんだったか……。右横腹を見ると、破れた団服の隙間

から血が溢れていた。

「あぁ、道理で……」

血を失いすぎたか、ふらっとくる目眩(めまい)に抗うことなく俺は膝をつく。食道から逆流してきた血液を飲み下すこともせず焼き付いた地面にぶちまけた。傷を負った腹を庇いながら横這いに倒れ込む。

「兄さん！　死んじゃイヤ！」

「……馬鹿、死んでほしくねぇなら手当てしろっての……」

「あ、うん……！　絶対助けるから！」

リナリーは両目いっぱいに涙を溜めながら、俺のウエストポーチから医療品を取り出す。ゴーレムで本部に連絡し、消毒に包帯とてきぱきとこなしていく。婦長直伝でとても手際がいい。これなら助かりそうだと俺は意識を手放した。

†††

「おはよう……ロア」

「……おやすみ」

「ちょっ！　僕だよ、君の兄貴分のコムイだよ！」

馬鹿だ、馬鹿がいる。

頭までシーツを被り鬱陶しい“自称”兄貴分に返す。

「俺には妹分しかいねぇはずだ、帰れ」

「……誰が治療したと思ってるんだい？」

「“神のみぞ知る”ってヤツだな」

「僕だよ！　まったく、目が覚めたならさっさと本部に帰るんだ。リナリーも待ってるよ」

リナリーの名を聞いて、ようやく俺は自分が助かったのだと実感した。試しに左手を握ってみる。よし、ちゃんと動く。

「俺のイノセンスは……」

肌身離さず持っていないと落ち着かない相棒を探す。コムイが眼鏡を光らせながら言った。

「それなら君の右手に、ホラ」

シーツを剥がすと長年共に戦ってきた俺の相棒、“焔葬ノ刃”が握られていた。

「手術中もずっと手放そうとしなかったんだよ。まったく君らしいね、ロア」

「うっせぇ」

「ところでリナリーに聞いたよ、ソーの枚数が増えたんだって！？
見せて見せて！」

対アクマ武器に話題が移ったところで急に目付きを変えるコムイをジト目で見ると、俺はイノセンスを発動させた。イメージがしっかりと頭の中にあるので何ら苦もなくそれは発動した。

「おぉ！　六連式かぁ、これはこれは、暴力的でロアのイメージにぴったりだね！」

「あぁん！？」

聞き捨てならないことが聞こえて俺は“焔葬ノ刃”のソーを円筒形に纏めて回転させる。赤熱するそれをコムイの首元に突き付けてやった。

「そいつぁどういう意味だァ？　俺はいつだって優しいお兄――」

「ギミック満点でいじり甲斐もありそうだ！　それにしても装備型が適合者の意思で自ら変形するなんて、不思議なこともあったもんだねぇ」

「おい、聞いてんのか？　刻む――」

「まさしくイノセンスの神秘！　神の結晶だけあって固定観念で括り付けられない多彩さだ。すこし見方を改めた方がいいかもしれない……」

「おーい、バカコムイー」

ダメだ、聞いちゃいねぇ。ひとまず発動を解除し、もとの無骨な柄付きの基部へと戻す。「あー」と残念がるマッドを尻目に、俺は再び眠りについた。

†††

「あぁ……やはり、彼のシンクロ率は１００％を超えている……」

「本当かい、ヘブラスカ！？」

ヘブラスカが俺のシンクロ率を告げる、１０８％らしい。コムイは新しい元帥候補の出現にハイテンションで答えた。傍らのリナリーがヘブラスカの触手の上から俺の袖を掴む。リナリーにしか向けたことのない柔和な笑顔で返せばニコッと微笑んでくれた。

ヘブラスカの触手がいつもより温かく感じられる。前はもっと触手然としていたが、最近は少し見た目に気を遣うようになったのか髪の毛に似た滑らかなものに変わっている。神々しいのは相変わらずだが、女性的な雰囲気がより際立っていると言える。有体に言えば、前より綺麗で色っぽくなった。

「どうしたロア、そんな黙って……まだ調子が悪いのか……？」

心配そうに声をかけてくるヘブラスカに首を振って答える。

「……別に。最後に会ったときと少し雰囲気がちがったからどうしたのかと思ってな」

「変だったか……？」

「いんや、似合ってる。綺麗だ、ヘブラスカ」

「そうか、ありがとう……」

巻き付いた触手が離れて自由になると、コムイが言う。

「エクソシスト歴六年目にしてついに臨界突破かぁ。さすが、君の才能には驚かされるよ」

「才能なんて不確かなパラメータ存在しねーよ。それに、俺としちゃあ本来の姿を思い出したって感じだしな」

「話を聞くかぎりでは……リナリーのお陰らしいな……」

ヘブラスカの言葉に俺は「あぁ」と返すと、包帯を巻いたリナリーの頭を撫でて言った。

「守りたいものがあったからこそだ」

「ロア兄さん……」

大切な妹分をひとしきり可愛がり、俺はエレベーターを上昇させた。

†††

「ラビっす、よろしくさー！」

「ワシは名を持たぬ、ブックマンとでも呼んでくれ」

「新しい仲間だからね、リナリーも仲良くしてね」

ロア兄さんが臨界者になってから二年、私が十四歳になってすぐのこと、新しいエクソシストの二人組が入団した。一人は長身の赤毛の男の子、もう一人は背の低いおじいちゃん。ラビとブックマン。ラビは眼帯とバンダナでミステリアスな感じで、ブックマンは目のメイクがちょっと怖い。

室長室で自己紹介している。私はコムイ兄さんの付き添いで、丁度細かい“契約内容”とかいうのの確認が終わったところだった。

「それにしても、こんなとこでこんな可愛い娘に会えるなんて思ってもみなかったさ！」

「え……う、うん」

なんだかすごく軟派な人だ。普段も褒められたりはするけど、こんな風に男の子としての意見とか言われたことなかったから少し緊張する。

「嘘をつけ。ここに来るまでに散々期待しておったくせに」

ブックマンはラビの保護者のようなものだろうか、視線を合わせずにたしなめた。

「ジジイはほっといて、これから街にデートでもブホワァ！」

「あ……！」

いきなりラビが視界から消えた！　何が起こったのとラビの飛んでいった方を見ると、土煙の中からなぜかロア兄さんが姿を現した。前に訓練で見せてもらったスクリュードロップキックをかましたらしい。

「危ないところだったなリナリー。こいつは所謂ゴキブリとかそういう類の生物（なまもの）だ、人間という種が生まれた頃から存在する。こいつが何をいってもまずは疑ってかかれよ、あらゆる行動には下心があるからな」

「え、あ……はい」

なんとか返事をすると、ロア兄さんはいつの間にか開いているドアをくぐって去っていった。ラビは壁に頭を埋めて気絶していた。ていうかナマモノって……。

コムイ兄さんがラビを引きずって部屋の奥に姿を消すのを見届けると、私はブックマンの方を向いた。ブックマンは額を汗で濡らしながら聞いてきた。

「今のは……？」

「ロアルド・シュティール兄さん、次期元帥候補なの。優しくてね、すっごく強いのよ！　コムイ兄さんと同じで過保護なところもあるけど、頼りがいのある人だから仲良くしてね」

「うむ、そうか……それにしても鮮やかな蹴りじゃった。一度手合わせしてみたいのう」

ブックマンは顎に手をあててうんうんと唸る。私が今頃鍛練場にいるだろうと告げると、走って行ってしまった。

「私はどうしようかな……」

誰もいなくなった部屋で呟くと、とたんに眠くなってきた。

「……寝よっか」

私は室長机に突っ伏すとそのまま夢の世界へと漕ぎだした。

第十二刻　元帥候補（後書き）

リナリーは年上との交友に慣れてるので、ブックマン相手でもあまり敬語とかありません。多分。

第十三刻　時計の歯車（前書き）

ＰＶ９９３２１、ユニーク１６０３８、お気に入り２２１。
ありがとうございます。

原作突入です。にしても最初の頃に比べてロアの口調変わったなぁ
（笑）

第十三刻　時計の歯車

「ようコムイ、今ベルリンにいるんだが近場になんかないか？　なんでもいい、適合者探しとかいい加減退屈で死にそうなんだよ」

『うーん、多分だけどイノセンスっぽいとこならあるよ。あくまで多分だから本当にあるか分かんないけど、多分あるんじゃないかなー多分』

「多分はいい。で、具体的には？」

『えっとねー、どうやら巻き戻ってる街があるらしいんだよね。時間と空間がある一日で止まって延々とその日を繰り返してるみたいなんだ』

「“巻き戻しの街”、もうそんな時分か……」

『ん？　なんか言った？』

「……なんでもねぇ」

『そう。ま、そっちに探索部隊（ファインダー）を回すから、詳しいことは彼らに聞いて。それまでそこで好きにするといい』

「了解、好きなだけ惰眠を貪るとするか」

『なっ……君は今、全科学班員を敵に回した……！』

「うっせー。じゃ探索部隊の件、よろしくな。後リナリーに愛してるって伝言頼む」

『……分かった。最近伯爵の動向が掴めなくて、きな臭い雰囲気だから気を付けてね』

「おう」

†††

十月二十五日、ロアルド・シュティール二十三歳。身長はいつの間にやら二メートルに届き、体重はついに三桁に乗ってしまった。俺もいよいよ長身から巨人の仲間入りだ、忌々しい。

「しばらく帰ってないが、もうアレン・ウォーカーも入団してるのか……」

「どうされました？」

「なんでも……つーかよくよく考えてみりゃ、なんでお前なんだ、トマ？」

「はい？」

ベルリンでアクマ狩りやら昼寝やらくつろいでいたところ、俺を迎えに来たのはこの包帯男、トマだった。

原作では確かウォーカーの初任務でアクマにボコられてたはずだが、なぜかピンピンしている。ずげータフだ。そして探索部隊の中でもデカい無線機担いで俺の足に着いてこれる数少ない内の一人でもある。

道すがら巻き戻しの街の詳細を聞き、今は鉄道駅からしばらく歩いてもう少しで城壁が見えようかというところ。

「ようやく見えてきました、あれが巻き戻しの街です。私たち探索部隊では中に入ることができないので、ロアさん単独での任務遂行となります」

小さな丘を越えると、周囲を城壁で囲まれたこの時代でいう中規模の街があった。俺は後ろ手に手を振ると、トマに言う。

「数日もしない内に解決する。それまで休暇だ、楽にしてろよ」

「じゃあ、そうさせてもらいます」

「おう」

†††

城門をくぐるとそこに広がるのはなんの変哲もない賑やかな街、しかしこの風景がもう十六回も繰り返されているという。

「そう言えばミランダがいるんだったか……ってこれ弟子入りフラグか？　俺が行ってなんとかなんのかねぇ」

元帥候補ということで、任務自体は他の元帥と同じくイノセンス持って適合者探しとかしてるんだが、このままいくとミランダは俺が面倒を見ることになりそうだ。まぁどうでもいいか。

「どっちにせよ夜まで待たなきゃなぁ。あぁ、2ちゃんが恋しい……」

俺は適当な宿を見つけると、ローズクロスを見せて部屋を借り夜まで待つことにした。

†††

「と、まあ夜になったわけだが……もうじき午前零時か」

懐中時計で時間を確認する。もう秒読みまで入っている。俺は煙突に腰掛け、来たるイノセンスの奇怪を待った。

――四

――三

――二

――一

ゴーーン、ゴーーン……

断続的な時計の鐘の音とともに街のいたるところに様々な形の時計盤の模様が出現し、少し置いてそれらが一斉に一ヶ所へと吸い込まれていく。街中を時計盤が飛びかう様子は壮観だった。懐中時計を取り出せば、みるみると針が巻き戻っている。

「こいつぁスゲェな、案外に強力なイノセンスなのかもしれん……と、あそこか」

時計盤たちの向かう先、ことの中心点、俺は流れを追っていきミランダの住んでいるだろう部屋を特定した。

「さぁて、飯食って行くか」

午前七時とあって開店している店などないのだが、そこはローズクロス、大柄な外見と相まってサングラスをずらし少し睨み付けただけで入れてくれた。そのまま軽食を頼み、早々に平らげて店を出る。伸び一つして目的地のアパートを目指した。

「どうやって発動させようかねぇ……今から悩むぜ」

†††

どうしてこんなことになったのかしら……。朝は決まって七時に目が覚めて、朝食を摂り、“昨日”と同じ時間に配達される新聞に今日こそはと淡い期待とともに見ればまた十月九日の日付に落胆する。八時五分前にはお隣さんの同じ文句の夫婦ゲンカが聞こえてくる。

そして思うの。

――また十月九日が来てしまったわ

とたんに涙が溢れてきて、無限地獄のような日々に絶望する。今日で十七回目……。

「ぐすっ……永遠にこのままだったらどうしましょう……」

すると不安になる私を慰めるように時計が八時の鐘を鳴らすの。何をやってもダメで、転職ばかりしていた私が出会った、捨てられそうになっていた時計。誰も動かせなかった、役立たずの時計。私だけが動かすことのできた時計。ダメな私のことを認めてくれた気がした……。

ほら、今にも鐘の音が鳴るわ。ゴーンゴーンと。

ゴーンゴー……ドガァッ！

「えっ、何！？」

突然の破壊音にドアの方を見ると、ドアは蝶番(ちょうつがい)ごと外れていて、入り口の穴には見上げるほど大きな黒服の男性がいた。特徴的な丸サングラスをかけて眉間に皺を寄せている。かなり怖い。黒服には立派な十字架の紋章が描かれていて、装飾も銀製っぽくてやたらと派手だった。まるでどこかの兵隊さんの制服みたい。

すると唖然として喋れない私に男性はその姿にぴったりの深い声で名乗ってきた。

「黒の教団、エクソシスト、ロアルド・シュティールだ。今日が何日目の十月九日か聞きに来たんだが」

何日目ってこの人――

「――この街の異常が分かるの！？」

さっきまでの警戒心はどこへやら、私はこの街の異常を認識できる人間を見つけた興奮からシュティールと名乗った怪しげな男性に飛び付いた。黒服の襟を握り締め、顔を見上げる。

「分かるさ、俺はエクソシストだからな」

私の頭に手を置いて答えるシュティールさん。黒の教団とかエクソシストとかよく分からない単語は無視して私は懇願する。

「助けて！　誰も気付いてないの。私だけが街の異常を認識できるだなんて、ノイローゼになりそうなのよ！」

「落ち着け、取り敢えずあんたの名前は？」

「わ、私は……ミランダ・ロットー」

「じゃあミランダ、まずは俺のことはファーストネームで呼べ。堅苦しいのは嫌いだ」

「は、はい……分かりました……」

私はたじたじになりながらも答えを返す。するとロアルドさんは「邪魔するぞ」と言って部屋の中へズンズンと入ってきた。これって不法侵入じゃないのと思ったけど、ドアを破壊された手前まるで自重する気がないのが分かったから言うに言いだせなかった。

ロアルドさんは部屋の中を見渡しながら言う。

「午前零時から午前七時に時間が巻き戻る過程を見た。この部屋にイノセンスがあるのははっきりしている。教皇令でこの部屋を捜索させてもらう」

「イノセンス？　教皇？　意味が分からないわ！」

「早い話が令状不要の家宅捜索ってやつだ。まあ当たりはついてるからひっくり返したりはしないさ……時間を司るイノセンスなんだ、擬態してるとすりゃ時計しか――」

ロアルドさんが私の大切な古時計に手を伸ばす。

「――ないわな」

するとその手が時計を擦り抜けた。

「ビンゴ……！」

「えっどうなってるの！？　私の時計が……！」

「ミランダ、一応確認しとく。こいつに触れるのか？」

ロアルドさんは再び私の頭に手を添えてまっすぐにアイコンタクトを取りながら聞いてきた。もちろん、触れる。毎日磨いているんだもの、当然よ。そう返すと彼はニッとナイフのように鋭く口端を歪めて言う。笑うという行為は相手に牙を見せる行為だとどこかで聞いたことがあるけど、今の私はまさしくその笑みに萎縮していた。

「適合者だな」

「適……合者？」

おうむ返しに呟くと、彼は説明を始めた。曰く、神の結晶、対アクマ武器。話が千年伯爵とかいう人（？）のことに飛んでから分からなくなったけど、「まあ、そんなことはどうでもいい」と言って仕切り直した。

「見た方が早い。適合者、つまりエクソシストの仕事内容を――」

すると突然ロアルドさんは私を抱き締めた。

「えっ！？　何！？」

一瞬の後に、爆音とともに凄まじい振動が身体の奥底を駆け抜けた。理解の追い付かない頭がパニックを起こしそうになったけど、彼の広い胸板に少しだけ冷静を取り戻す。なんだか逞しい……って

何考えてるの私！？

彼が私を放してから最初に見えたのはオレンジ色の光、炎だった。それは生き物のようにうねって私の周りを包み込む。激しい炎に恐怖を抱くと同時、その温かさに優しさを感じたのは気のせいではないみたい。

「温(ぬる)いっ！」

彼が手を振ると、崩れた壁から私たちに向けて放たれた青い炎が掻き消える。いつの間にか彼の右手に握られている炎を纏う武器が壁の穴から入ってきた化け物たちを焼き払い、断末魔の叫びを遺して静寂を運んだ。

私を包んでいた炎は消え、巨大な武器を手に彼が振り向く。

「エクソシストの仕事内容は……あいつら化け物どもを破壊すること、ただそれだけだ……」

その武器から炯々（けいけい）と放たれる光が丸サングラスに反射して私の目に入ってくる。私はその眼光と得体の知れないショックで座り込んでしまう。

何言ってるのよ、私にあんなことができるはずないじゃない。アクマとかいう化け物に対抗する度胸も力も私にはないもの。いくら私が適合者とやらでも、化け物を相手取って戦うだなんて無理もいいところ。昔から、何をやってもダメだったもの……どうせ無理ならもうしない方がいいわ！　また役立たずと罵られるだけよ！

「無理じゃねぇさ。　俺が教えるんだ、役立たずだなんて言わせる

かよ」

そんな私に彼は牙を剥いて静かに反論する。サングラスの奥は見えなかったけど、怒ってるのは分かる。

私はあなたみたいにすごい人間じゃないわ。自信なんてあるわけない、みんな私より要領よくスイスイ前へ行くんだもの。たまたまイノセンスなんてものに選ばれたからって、何かできるでもない。私がするくらいなら、誰か他の人がした方がよっぽどいいに決まってる。

「何言ってる、イノセンスの使用は適合者にしかできない。他の奴が手を出しても死ぬだけだ」

彼は大きな手で私の肩を掴むと、強引に目を合わせてきた。その暗闇の奥の瞳には、さっきまでの怒気は少しだけど薄れているように見える。聖人とは程遠い雰囲気だったけど、どこか諭すような視線だった。

「ミランダ、代わりはいない、お前にしかできないんだ。……だから来い。心配しなくても内は終身雇用だからな、死ぬまで役に立ってもらうさ」

どうしてか、彼の言葉は私の胸にスッと入ってくるように感じられる。強引な命令口調なのに……。いつもの自分と違うみたい。思えば、こんなこと今までにあったかしら？　仕事をクビになるのを弁明しようとしたことはあっても、仕事の申し入れを断るだなんて……。それじゃまるで――

「――頼りにされてるみたいじゃない……」

「今頃気付いたのか……。とにかく、教団にはお前とお前の時計の力が必要だ。イヤと言っても来てもらうことになるんだが……」

ロアルドさんが武器を懐(ふところ)にしまい込むと、私は時計の方に向き直った。

この不思議な時計がダメな私の人生を変化させたのね。分かってる、自分の中からもこれが転機だと囁く声が聞こえてくるわ。私はきっと、この黒服の人に着いていくべきなんでしょう。何せ彼は私の時計を追って来たのだし、彼自身不思議な武器を持っているのだから。黒の教団が私の居場所になるのなら、私を認めてくれるのなら、誘いを断る理由なんてない。

「……行くわ。私にもできることがあるのでしょう？」

「あぁ」

彼は腰に手を当てて満足げに頷いた。私は時計のガラスを指でなぞりながら言った。

「時計さん、ありがとう。あなたは私を慰めてくれてたのよね？……でももう大丈夫、だから時間を元に戻して」

すると時計はまばゆい光を放ち、歪んで大きな時計盤へと姿を変えた。その針が逆回りに巻き戻されていくと、壊れたドアと崩れた壁から時計盤の形をした影が吸い出される。吸い出された部分は綺麗に元通りになっている。これが私のイノセンスの力なのかしら？

時計の針が二十四時間分回って元の位置に来ると、壊れた箇所は

完全に修復されていた。でも吸い出した時間はなくならなず、時計盤は空中に漂っている。

「なかったことには、できないのね……」

「問題ない、修理代くらい経費で落ちる」

「ならよかった……うっ！」

「ミランダ！」

何これ、急に胸が苦しくなる感覚。話している途中にいきなりやってきた痛みに私は崩れ落ちる。どうなってるの！？

ロアルドさんが背中に手を添えて介抱してくれるけど一向に楽にならない。むしろどんどん苦しくなるばかり。困惑している私に彼は言った。

「ミランダ、発動を止めろ。これ以上は危険だ」

「こんな、んじゃ……役になんて！」

「教団で加工すればマシになる。今は無理をするな」

私よりもずっと先輩なのだろう彼の言葉には重みがあって、私は言われた通りにイノセンスを停止させた。とたんに胸の息苦しさが晴れる。

「はぁ、はぁ……」

「よくやった。街の異常も治ったろうし、仲間を呼ぶ。それまでゆっくりしてろ」

吸い出した時間が元の場所に戻っていく。彼に体重を預けると、特に避けるでもなく受け止めてくれた。見た目に反して中は結構紳士的みたい。さっきの襲撃でベッドは使い物にならなくなってしまったけどあまり気にならなかった。この短時間に随分と図太くなったかも。彼はポケットから黒くて羽根の生えた一つ目を取り出すと短く喋ってそれをしまった。

「……ロアルドさんはエクソシストになってどれくらいなの？」

「だいたい十年だな。……後、これからは仲間なんだ。ロアでいい」

若干声を小さくしてロアルドさんは言った。ちょっとだけ可愛かったかも。

「でも、年上だろうし……」

「俺は二十三だ」

「え！　私二十五だけど……年下だったのね」

なんと、彼は年下だった！　粗暴なところもあるけど、物怖じしないししっかりした印象があったからてっきり三十近くかと思ってたのに。確かに十年も戦いの中で生きていれば大人っぽくもなるわよね。

「まぁ、エクソシストに年は関係ない」

「そう、じゃあロアくんね」

「……一気に親しくなったな」

え、そ、そんな……図々しかったかしら私……年下と言えど大先輩相手にやっぱり失礼よね……私ったら新人のくせに調子付いて……！

「――だーもー、俺が悪かったよ！　ったく好きに呼べっ」

私の自虐に彼は声を上げ、そっぽを向いてしまった。気を遣わせてしまったのね、やっぱりエクソシストになっても私はダメなままなのかしら。……それはとにかく、せっかくの好意を無駄にはできないかったから、私はなんとか返事をした。

「そ、そう？　分かったわ……これからよろしくね、ロアくん」

ロアくんは答えない。その沈黙は彼の仲間の白い服の人たちが来るまで続いた。

.

第十三刻　時計の歯車（後書き）

これ以上の文章は今の自分には難しい。

第十四刻　口約束（前書き）

ＰＶ１２３２５７、ユニーク１９３６９、お気に入り２５８。
ありがとうございます。

ナデポなロア。

第十四刻　口約束

——リナリーいわく大切なお兄さん

——コムイさんいわくいい弟分

——神田いわくシスコンの戦闘狂

——婦長いわくいい男に育った

——リーバー班長いわくすべてを受け継いでしまった

「……よく分かんないな、ロアルドさんって」

僕は件（くだん）のロアルドさんが作った彫像の保管室でうーんと唸った。彼は人によって印象の大きく異なる人だ。とてもいい人だと答える人もいれば、公害か何かのように遠ざける人もいる、でも腕は立つらしい。後、所謂マッチョらしい。

「作風からはかなり繊細な人に見えるけどなぁ。まぁ、見た目と中身が必ずしも合致するとは限らないのはジェリーさんで確認済みか……ここはキャラ濃い人多いし」

高く売れそうだななんて思いながら眺めていると、扉を開く音が

して僕は目を移した。

そこには綺麗な黒髪をなびかせるリナリーがいた。

「ここにいたのね、捜したんだから。コムイ兄さんが呼んでるよ」

「……ロアルドさんって聞くよりも穏やかな人なんですね」

リナリーはいきなりな僕の発言に子首を傾げる。僕は視線を四枚羽根の隻椀の天使に戻すと、天使の持っている槍を撫でた。

「すごく情緒的なデザインだなって。こんなの粗暴な人には作れませんよ」

「彫ったのはロア兄さんだけど、デザインしたのは私よ？」

「え？」

衝撃の告白に僕は背筋が冷えるのを感じた。なんか気まずい……！

するとリナリーは彫刻に目を向けて呟くように話しだした。

「……私はね、小さい頃にアクマに両親を殺されてコムイ兄さんと二人で生きてきたの。でもね、ある日教団の使いがやって来て、適合者として私は連れていかれた。もう十年も前のことよ。それからしばらくは自由に外出もできなくて、もちろんコムイ兄さんとも会えないし、すごく寂しかった」

向き直ると視線を合わせて言う。

「そんな時だったの。ロア兄さんが来てくれたのは」

込み入った話かと思ってたけど、きらきらした笑みには不安の色はなかった。

「私を外の世界に連れ出してくれて、辛かったシンクロテストにもいろいろ便宜を図ってくれて。すごく優しくて、たくさん甘えさせてくれたわ」

お兄さんのことで頭がいっぱいになってるのか、リナリーはいつにも増して饒舌だ。大好きなんだろうな、まるで僕とマナみたいだ。僕はまだ見ぬ先輩エクソシストのことを知るため、聞きに撤した。

「――任務から帰ってきたら、私のデザインした像を彫るの。お陰でデッサンが上手くなったわ。それから二人でニスを塗って……そうそう、実はロア兄さんが彫刻を始めたのはイノセンスとのシンクロ率を上げるためなのよ。ここにある作品はみんな“焔葬ノ刄（クレメイター）”で削り出して作ったものなの。そういう意味では彫刻とは言えないかもね」

……だんだんと思い出話からただの兄自慢になってるような気が……ていうかコムイさんの時はそんなに自慢しませんでしたよね？これがリスペクトの差なのか。

リナリーは聞いてもないのに、天井近くに付けられた掛け時計を指差して説明する。

「――それであそこの時計はこの部屋に来るとつい時間を忘れちゃうから取り付けられて……」

急に押し黙るリナリー。よく見ると長針がさっきから三十度ほど右回りに進んでいる。思ったより全然時間は経ってなかったなと感じた直後、短針も三十度ほど右回りに進んでいるのに気付いた。

「もう、アレン君ったら言ってよ！　上手に聞き役しちゃって、コムイ兄さんが呼んでるんだってば！」

「ゴ、ゴメンなさい……じゃあ行ってきます」

頬を染めて恥ずかしそうにまくしたてるリナリーを、とても可愛いと思った。

「私も呼ばれてるのっ」

「そうなんですか」

「……もう！」

†††

ロアルドさん帰還の報は瞬く間に城内に行き渡った。なんでも、新しい適合者が見つかったんだとか。科学班の人たちは嬉しさ半分疲労半分といった感じだった。

エレベーターが上がってくる。十人余りが人だかりを作ってその様子を見つめる。そこにいたのはいかにもな雰囲気を纏った大柄な

男性と、ウェーブした黒髪を持つ女性。男性の方はロアルドさんだろう、特徴的なサングラスに炎の模様のバンダナをつけていて、その身長は決して背が低いわけではない隣の女性が子どものように見えるほどに高い。一方女性は、“影の射す美人”という表現がしっくりくる。

「あの女の人が新しい適合者ですかね」

「……」

リナリーに聞いてみるが返事が返ってこない。どうしたんでしょうか。

「リナリーっ」

「えっ！？　あ、アレン君、何？」

「……いえ、ぼーっとしていたので。やっぱり半年ぶりに会うんですし、緊張もしますよね」

「う、うん……ちょっとだけね……」

濁すように返すリナリーから視線をエレベーターに戻す。見たところ女性が新しい適合者だろう、オロオロしていて終始ロアルドさんの団服の裾を摘んでいた。可愛げのある人だな。

ロアルドさんの目がリナリーを捉えると、エレベーターは止まり二人は降りてきた。ちなみに食堂のある階だ。

「ロア兄さん！」

駆け出したリナリーを追って二人の方へと向かう。ロアルドさんはサングラスを外した手をリナリーの頭に置いた。威圧的な容姿にしては驚くほど穏やかな目で愛しそうに妹分をあやす様は、まるでコムイさんを見ているようだ。

「今帰った、リナリー」

「うん、お帰りなさい。……そちらの方は？」

「あっ。わ、私、ミランダ・ロットーと言いますっ……エクソシストになるためにロア君、じゃなくてシュティール元帥の弟子に――」

「ミランダ、上がりすぎだ。それに俺はまだ元帥じゃねぇ」

「ごめんなさい……」

新メンバーのミランダはかなりの恥ずかしがり屋らしい。さっきからずっとロアルドさんの陰に隠れている。リナリーをチラチラ見ながらミランダは言う。

「……えっと、あなたがリナリーちゃんよね、彼から話は聞いてるわ。後輩になるんだけど、よろしくね」

「えぇ、ミランダもよろしく！」

「――んで、そこのモヤシは誰だァ？　リナリー、お前のストーカーか？」

えっ、ちょ……モヤシって言われた！　て言うかストーカーって

なんですかっ、僕変態ですか！

「あの子はクロス元帥の弟子のアレン君。三ヶ月前に入団したの。左腕にイノセンスを持つ寄生型のエクソシストよ」

「ど、どうも。アレン・ウォーカーです……」

怯みながらも挨拶する。さっきまで穏やかだったロアルドさんの目付きが急に刃物のような鋭いものに変わった。視線で人を殺すってこういうことを言うのかとすくむ足で考える。

「一時間後に鍛練場に来い」

そう言いながらいつの間に発動したのやら鋭い刃の並んだ六枚の剣のような対アクマ武器で僕の頬をペチペチとはたくロアルドさん。プチプチとちっちゃな切り傷が大量生産されていく。血っ、血ィ滴れてます！

「もう、兄さんったらダメよ。明日の早朝には任務に出なきゃいけないんだから、今日のところは勘弁してあげて？」

「チッ、そういうことならしゃーねーか……じゃ後でな、リナリー」

「うん、また後で、ロア兄さん」

ロアルドさんは武器をしまうとミランダを連れて食堂へと去っていった。

僕はと言うとフッと身体から力が抜けて、その場にへたり込んでしまった。

「……助かりました、リナリー。殺されちゃうかと思いましたよ……」

「フフ、ロア兄さんは男性にはキツいとこあるから。でも根はいい人よ」

助けてもらってアレだけど、少なくとも僕にはそうは見えない……。絶対Sだよ。

僕は立ち上がると、リナリーに別れを告げた。そしてどっと疲れを感じながら自室を目指すのだった。

†††

黒の教団の室長さんと面会して正式に入団を果たしてから十日目、ようやく私の対アクマ武器が完成した。名前は“刻盤（タイムレコード）”。ロア君の“焔葬ノ刃（クレメイター）”と同じで装備型のイノセンス。これで私も皆の役に立てると思って、嬉しさでつい傍にいたロア君に飛び付いてしまったわ。それから慌てて離れたけど……。

今日からエクソシストだって私の頭を撫でるロア君の手は優しくて、何年かぶりにあったかい気持ちになれた。下ろした髪に指が絡んで恥ずかしかったけど、それ以上に嬉しかった。

「髪、下ろしてた方が綺麗だ」

誰かに、とりわけ男性に誉められるなんて初めてで対応に困ったけど、その一言でお洒落にも少し気を遣うようになった。我ながら調子に乗ってるとは思うけど。

シンクロ訓練で教えられたことと言えば二つだけ。イノセンスを求めること、そしてイノセンスの求めに従うこと。たったそれだけで、シンクロ率は上がると彼は言った。単純だけど簡単ではない。私なりに頑張ってはいるのだけどね。

「行くぞ」

急に彼は言った。いつまでも本部に留まってはいないだろうとは思っていたものの、私はまだまともに戦えないひよっこエクソシスト。どこにと返せば、

「任務がてらケビンのじーさんに会いに行く」

ケビンさんって誰なのかしら？　私の表情から疑問を察知したのかロア君は教えてくれた。私ったらまた気を遣わせてしまったわ。

「……ケビン・イエーガー元帥、豆粒みてぇなじーさんだよ。弟子ができたら顔を見せるって言ってあったからな……どうでもいい口約束だが、今回は少し勝手が違うんだ」

どうやら彼は結構義理堅い性格みたい。サングラスの奥の瞳は堅かった。

「そういうわけだから、どこへ行くにも原則俺の手の届くところにいてもらう」

するとロア君は手袋をはめたままの手を私の頭の上に置いて続ける。

「ただでさえ後衛型なんだ、この距離を守れ。そしたら何があっても俺がお前を守ってやる。いいな、ミランダ」

「ロア君……分かったわ」

頼もしい彼の弟子になれてよかったと思った。

……そのときまではそんな甘い考えでいられたの。

第十四刻　口約束（後書き）

ヒロインはまさかのミランダさんです（爆）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4701m/

Ｄ.Ｃｒｅｍａｔｏｒ

2010年10月19日21時07分発行